平成 22 年度　文部科学省委託
生徒指導・進路指導総合推進事業
「いじめ対策緊急支援総合調査研究」

「いじめの未然防止実践研究」

成 果 報 告

いじめの未然防止につながる児童の社会性の育成に向けて

平成23年 3 月

愛媛県教育委員会人権教育課

は　じ　め　に

平成18年度以降、いじめを苦にした子どもの自殺事件が、マスコミ等で大きく取り上げられ、さらに、パソコンや携帯電話を介したネット上のいじめへの対応が、喫緊の課題となるなど、いじめ問題への幅広い対応が求められています。

いじめ問題では、学校教育に携わる教職員一人ひとりが、いじめはどの子にも、どの学校にも起こりうることや、この問題の重大性を認識し、いじめの兆候をいち早く把握して、迅速に対応することが大切です。各学校におかれましては、このような早期発見・早期対応に向けた様々な取組を、組織的で計画的に推進されていることと存じます。

また、この問題の根本的な解決のためには、いじめの未然防止の観点に立った取組を充実することも不可欠です。生命や人権の尊重をはじめ、倫理観の確立、規範意識の醸成、自主性や協調性の育成など、児童生徒一人ひとりの豊かな人間性を育む様々な活動を通して、いじめを許さない、いじめを生まない風土づくりに努めることが重要です。

愛媛県教育委員会では、このようないじめの未然防止につながる、児童の社会性の育成に向けた取組を、県内の全ての小学校においてより一層充実するため、本年度、文部科学省の委託を受け、県内の小学校４校を研究推進モデル校に指定し、児童の実態に応じた効果的な取組について実践研究を行ってきました。

この研究報告書は、各研究推進モデル校における調査研究の全容や成果についてまとめたものであり、子どもたちが安心して生き生きと生活できる学校づくりに向けた実践の一助になれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査研究に取り組んでいただいた各学校の皆様をはじめ、本事業に御協力いただいた関係各位に心から感謝を申し上げます。

平成23年３月

愛媛県教育委員会人権教育課長

目　　次

はじめに

■　研究推進モデル校　：　西条市立大町小学校　……　　1

■　研究推進モデル校　：　西条市立多賀小学校　……　１１

■　研究推進モデル校　：　愛南町立東海小学校　……　２１

■　研究推進モデル校　：　愛南町立福浦小学校　……　３１

〈研究推進モデル校〉

西条市立大町小学校

Ⅰ　本校の概要

１　校区の概要

大町小学校校区は、西条市の東部に位置し、西日本の最高峰石鎚山を南に仰いでいる。また、日本の名水百選に選ばれたうちぬきがある水の都である。

本校区は、国道11号を境に南部は田園地帯、北部は市街地、商業地域が広がる環境の中にある。近年は、市街地を中心にアパートやマンションの建設が進み、人の出入りが多くなってきており、校区の人口は、平成22年３月31日現在10,789人（4682世帯）である。

２　児童の実態

本校は、児童数592人、学級数22学級（特別支援学級３学級を含む）で教職員44人（市職職員等含む）の西条市内では大規模な学校である。保護者の教育への関心も高く教育活動に協力的である。児童は、全体的に明るく活発で、業前や業間・昼休みには運動場で友達と仲良く遊んでいる姿を目にする。学習にも積極的に取り組むことができている。しかし、友達との関わりの中で、自分の思いを言葉で相手にきちんと伝えることや、相手の考えを正しく受け止めて自分の考えを伝えるということができにくい児童がいるという課題が前年度の反省から浮かび上がっている。

Ⅱ　研究の概要

１　研究のテーマ

「自尊感情を高め、相手を思いやる心の育成」

２　テーマ設定の理由

近年、児童を取り巻く社会環境の変化や家庭・地域の教育力の低下により、困難な条件のもとにある児童が増加している。いじめや不登校問題を解決するには、生活習慣や学習習慣の改善を図るとともに、人との関わり方を学び、身に付けることが必要である。学校・家庭・地域の連携のもと、豊かな体験活動を通して自尊感情を高め、相手を思いやる心の育成に取り組みたい。それにより、自他の生命を大切にし、よりよい生き方を求める児童の育成につながると考え、本テーマを設定した。

３　研究の仮説

異年齢集団による交流活動を推進することにより、自分を大切にする心や相手を大切にする心を育てることができると考える。また、ソーシャルスキル等を取り入れた授業改善に取り組むことや家庭や地域との連携を進めることにより、自尊感情を高めよりよい生き方に気付かせることができるであろう。

４　研究の内容

⑴　豊かな体験を通した、なかま集団の育成（集団づくり）

ア　異年齢を基本とした、学級・学年を超えた交流活動の推進

イ　集会の工夫や児童の主体的な活動の充実

ウ　保・幼・小・中の交流・連携を生かした教育の推進

⑵　自ら学び、共に高め深め合う授業改善の充実（授業づくり）

ア　授業の工夫

イ　学習習慣の育成

ウ　授業評価の工夫

⑶　家庭や地域と連携した生活習慣の育成（生活づくり）

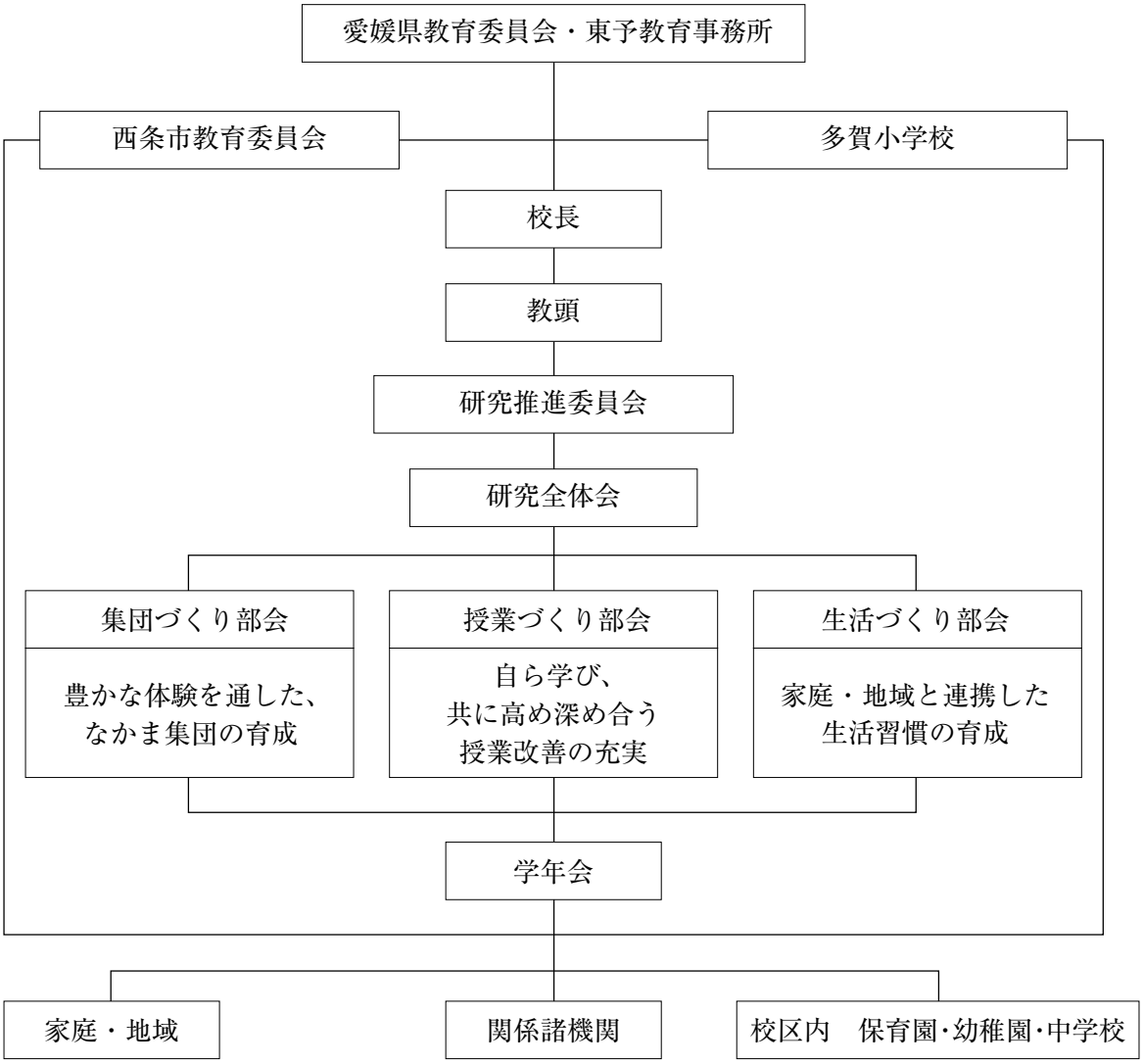
ア　児童へのアンケートと意識の変容

イ　生活習慣の改善

ウ　関係機関との連携の強化

エ　教育相談の充実

５　研究の組織



Ⅲ　研究の実践

1　豊かな体験を通した、なかま集団の育成（集団づくり）

⑴　ねらい

ア　異年齢での交流活動を通して人を思いやる心と行動力を育てる。

イ　体験活動を通してコミュニケーション能力を育てる。

⑵　実践内容

ア　異年齢を基本とした学級、学年を超えた交流活動の推進及び集会の工夫や児童の主体的な活動の充実

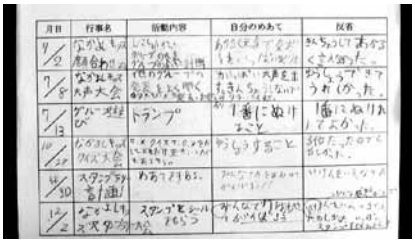
６月中旬　異年齢集団の編成

・　活動に適する人数、男女、学年構成などを考慮し教員が決定する。

・　「なかよしキッズグループ」という呼称については人権委員会が中心になって児童が決める。

６／23　グループリーダー会

・　５、６学年は、前もって集まり、どのようなグループにしたいか、顔合わせ会はどのように進行するかなどの打ち合わせをする。



（「あ・は・は」の自己診断カード）

７／２　グループ顔合わせ会

・　全児童が、自己紹介ができるように準備をして臨む。

・　学校生活スローガン「みんなで楽しく『あ・は・は』」（あいさつ「はい」の返事はたらきかけよう）の自己診断カードに記入し、自己評価する。

７／８　ショート集会「大声大会」

・　グループごとに前もって決めていた言葉を順番に叫んだ。練習を十分にして、力を発揮できたグループあり、気持ちがややそろわないグループありで、審査員が決めた楽しい賞の発表で盛り上がった。グループ結成直後、結束力が強まる成果のある行事となった。

（舞台上で声を合わせて、「オー」）

９／６　第１回　昼休みなかよし遊び

・　グループの考えで遊ぶ内容や場所を決めて実施した。おにごっこやドッジボールなど外遊びを選んだグループが多かった。初めてなので、集合の確認や、準備に手間取ったグループがあった。後で、自己診断カードに反省を書き、次回の活動に生かせるようにした。

９／９　運動会種目の練習会

・　グループが縦１列になって踊る演技を行う。５、６年生は、前もって踊り方の練習を行い下の学年に教えた。

（「ヘイ！ヘイ！」と元気よく）

９／26　運動会の種目

・　「みんな集まれなかよしキッズ」で保護者や地域の方に学校の取組を公開した。

10／４　昼休みなかよし遊び

・　人権委員会の呼びかけで、グループごとに集団ゲーム（「フルーツバスケット」や「リーダーはだれだ」）をした。高学年は、低学年に遊び方を教えるなどリーダーシップをとって進めることができた。担当教師は、極力見守る姿勢で接したことが成果につながった。

12／３　第１回校内オリエンテーリング大会

○　ねらい

・　異年齢集団の中で相手の立場を考えながら、みんなが楽しい活動にしようとする。

・　オリエンテーリング遊びについて理解し、自分たちで工夫して開催する意欲をもつ。

○　方法

事前に児童が希望するゲーム等を募集する。教室、体育館など様々な場所に、児童の希望を取り入れた体験コーナー、ゲームコーナーなどを教員が用意する。

新聞じゃんけん	輪投げ	けん玉	ダーツ	ボーリング
まめつかみ大会	ごみバスケット	ジェスチャー	空き缶つみ	
指スマ	ペンたて競争	ぼうずめくり	くじびき	など

あらかじめグループごとに話し合ってコースを決め、一緒に回る。

子どもたちは70分間、夢中になって会場を巡り歩いた。異年齢の集団が共に活動する中で、コミュニケーションが成立し、互いを理解し、やさしさや心のつながりを感じ合える関わりが生まれた。

（児童の感想）

スタンプラリー大会でみんなと協力しながら活動できたので仲良くなれたと思います。３学期は、ぼくたちがやるのでわくわくします。（５年）
ぼくたちの班は、少しけんかがありましたが、５年生が止めてくれました。ぼくはもう少し気を配ったらよかったと思いました。その後は、遊ぶ順番など仲良く決めたし、反省のときみんなが楽しかったと言ったのですごくよかったです。（６年）

（出発前の相談）

（まめつかみ大会　説明の板書）

１／24　昼休み集会計画会

２／25　第２回校内オリエンテーリング大会

○　ねらい

・　異年齢集団の中で一人ひとりが尊重され、協力してみんなが楽しい活動にしようとする。

・　自分たちで工夫した方法でオリエンテーリング遊びを開催する。

○　方法

教室、体育館など様々な場所に体験コーナー、ゲームコーナーなどグループごとに子どもたちが考えて設置し、運営する。

・　昼食を挟んで前半と後半に分かれ、入れ替わる。
・　昼食はグループで場所を決め、お弁当を食べる。
・　説明、進行は人権委員会が行う。

３／７　反省会

２　自ら学び、共に高め深め合う授業改善の充実（授業づくり）

⑴　ねらい

ア　学習習慣の定着を通して、聞く・話す態度を育て、他を大切にする心を養う。

イ　友達と関わり合う授業展開を工夫し、コミュニケーション能力を育てる。

⑵　実践内容

ア　授業の工夫

夏季休業中に、愛媛大学教育学部から講師を招き「いじめの未然防止のためのソーシャルスキル」を、新居浜市教育委員会からも講師を招き「構成的グループエンカウンター」の研修を行った。また、校内研修会では、各学年１回ずつ公開授業を実施し、全教職員で効果的な授業展開について共通理解を深めた。

第５学年　　道徳指導案

1　日　時　　平成２２年１１月１１日（木）５校時（14:00 ～ 14:45）
2　主題名　　相手に気持ちよく伝えよう　（２－②　思いやり）
3　資料名　　悟の失敗（「すべての先生のための『情報モラル』指導実践キックオフガイド」社団法人日本教育工学振興会より引用）
4　本時の指導
（1）　ねらい
○　文字情報のみによるコミュニケーションでは、友達の心を知らず知らずのうちに傷つけることもあることに気付かせる。
○　相手を思いやる気持ちをもち、コミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
（2）　準備物
ワークシート、挿絵
（3）　展開

学習活動	主な発問と予想される反応	教師の支援と評価
1　事前学習を振り返って、よかったことと、いやだと思ったことを話し合う。	○　メールを体験して、よかったことや嫌だと思ったことはどんなことですか。 ・　自分のメールを喜んでくれてうれしかった。 ・　励ましのメールをもらってうれしかった。 ・　悪口を書かれているように感じた。 ・　言いたいことがうまく伝わらなかった。	○　前時の学習を想起させ、感じたことを発表させることで、本時のねらいをつかませる。
	○　こんなメールをもらった子がいます。どう思いますか。 ・　いやな書き方だな。 ・　腹が立つな。	○　健太のもらったメールを見せ、気持ちを考えさせることで、健太の気持ちに共感させる。
2　資料を読んで話し合う。 ・　普段の悟と健太について	○　普段の悟と健太はどんな関係でしょう。 ・　仲がいい。 ・　言いたいことを言い合える。	
・　メールを送った悟の気持ち	○　悟はどんな気持ちでメールを送ったのでしょう。 ・　試合で転んだ健太を励ましそう。 ・　落ち込んでいる健太を元気にしたい。	
・　メールを受け取った健太の気持ち	○　メールを受け取った健太はどんな気持ちだったのでしょう。 ・　ぼくのミスを責めているんだ。 ・　友達なのに、どうしてそんなメールを送るんだよ。 ・　悟に会いたくないな。	○　二人の気持ちを考えさせることで、感じ方や思いの違いに気付かせる。
・　真司と話した後の悟の気持ち	○　真司から「ぼくだってこんなメールいやだよ。」と言われて、悟はどんなことを考えたでしょう。 ・　いつも話してるみたいに書いたのに失敗した。 ・　励ますつもりだったのに、傷つけてしまった。 ・　どうしよう。	○　思いがけない誤解を与えてしまったことに気付いた悟の気持ちを考えさせることで、文字だけで真意を伝える難しさに気付かせる。
3　コミュニケーションツールを利用するときに気を付けることを考える。	○　自分が健太にメールを送るとしたら、どのように書きますか。 ・　次の試合でまた一緒にがんばろう。 ・　気にするなよ。	○　受け取る側の健太の気持ちになってメールの文面を考えられるようにする。 ◎　健太の気持ちを考えてメールの文面を書いているか。 （ワークシート）
	○　友達のメールを読んでみて、どう思いましたか。 ・　励ますように書いているのがうれしかった。 ・　また一緒にサッカーをがんばろうと思った。	○　メールを読み合い、感じたことを伝え合うことで、相手にどのように伝わったかを実感させ、相手の気持ちを考えることの大切さを感じられるようにする
	○　どんなことに気を付けてメールの文を考えましたか。 ・　相手が傷つかないような書き方をした。 ・　もらった人の気持ちになって書いた。 ・　書いた後で読み直した。	○　相手の気持ちや立場を考え、言葉を選んで丁寧に伝えることの大切さをおさえる。
4　教師の説話を聞く。		○　教師の経験を話すことで、気持ちのよいコミュニケーションを図ろうとする意欲を高められるようにする。 ○　文字だけで気持ちを伝えることが難しいときには、顔を見て話すことも必要であることを確認する。

（第５学年　道徳指導案 「悟の失敗」）

また、大町小学校の学校生活スローガン「みんなで楽しく『あ・は・は』（ⓐいさつ「ⓗい」の返事　ⓗたらきかけよう）」のそれぞれを伸ばすために、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルを取り入れた、系統立てた授業展開の指導案を考えた。効果的なエクササイズを取り入れて、子どもたちの自己理解、自己受容などを深めていくことをねらいとしている。２学期は「ⓐいさつ」に関するエクササイズを学年ごとに実践した。

（3 年道徳「じゃがいもの歌」 エンカウンターを取り入れた授業風景）

イ　学習習慣の育成

本校では昨年度、児童朝会や学習の場面から子どもたちの表現力やコミュニケーション能力の弱さが浮き彫りになっていた。そこには、「認められている」という思いをもてない子どもや、自分に自信をもつことができない子どもたちの姿が見られた。そこで、学習習慣をしっかり身に付けることで、学習の中で互いに認め合う集団を育成していくことが大切であると考えた。

発表の注意点を「聞く－あいうえお」「話す－かきくけこ」としてまとめた。それに気を付けながら発表することで、互いに気持ち良く、思いを理解し合い、伝え合うことができるようにするためである。

「聞く－あいうえお」「話す－かきくけこ」を全教室で掲示・指導した。
↓
聞く態度を育て、他を大切にする心を養う。
↓
受け入れてもらうことで心が安定する。

ウ　授業評価の工夫

学校では「分かる授業、できる授業」こそが、子どもたちの自尊感情や安心感を高めることにつながる。そこで子どもたちの意見が授業に反映されるよう、授業についてのアンケート（低学年、中・高学年別）を各学期に１回以上行うこととした。アンケートは、「１　じゅぎょうはよくわかる」「２　先生は、わかるまでおしえてくれる」など児童の立場から評価する項目を設定し、それぞれ４段階で評価するようにした。最後には教師へのお願いを記述する欄も設けている。

アンケート結果は各教職員で集計・分析し、自由記述にて記録を残すこととし、次学期からの自己研修につなげることとした。

３　家庭や地域と連携した生活習慣の育成（生活づくり）

⑴　ねらい

家庭や地域の連携のもと生活習慣の改善を図り、自尊感情を高め、相手を思いやる心を育成する。

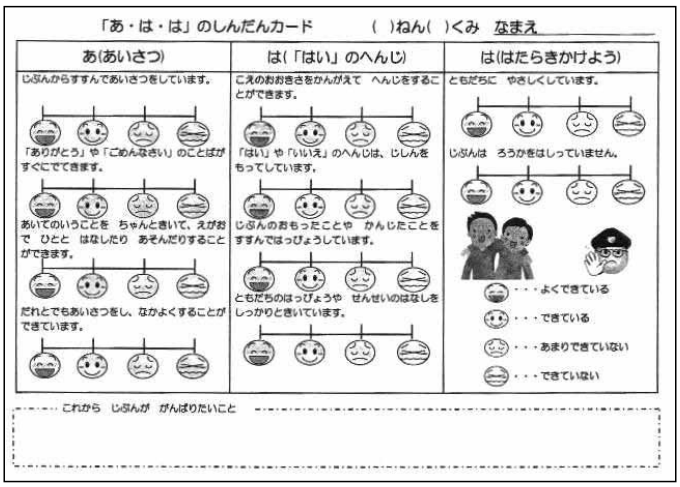
⑵　実践内容

ア　児童へのアンケートと意識の変容

学校生活スローガン「みんなで楽しく『あ・は・は』」に関連させたアンケートを作成し、生活改善へ向けての意識変容を図るとともに、児童の現状を客観的に把握することに努めた。第１回目のアンケート結果からは、他者と関わろうとする意識はあるものの、全体の場では、自分を出し切れない児童の実態が浮かび上がってきた。この結果から、自己肯定感を育て、他者と積極的にコミュニケーションできる児童を育成することが重要であるとの認識のもと実践を重ねようと共通理解を図った。

第２回目のアンケートは11月末に実施した。実践前に実施した第１回目のアンケート結果と比較すると、２回目に実施したアンケートの方が、どの設問でも「よくできている」と回答した児童が増加しており、本校での取組の成果が表れていることが分かった。ただ、この増加は「できている」と答えていた児童が「よくできている」にシフトしている傾向があり、「よくできている」・「できている」と答える児童の合計と、「あまりできていない」・「できていない」と答える児童間での合計には変動があまり見られなかった。

今後、児童の生活改善を図りながら、自尊感情を高めたり、相手を思いやる心を育成したりするためには、「あまりできていない」・「できていない」と答える児童をどのように意識付け、変容させていくかが今後の課題である。



【低学年用（１～３年）アンケートの様式】

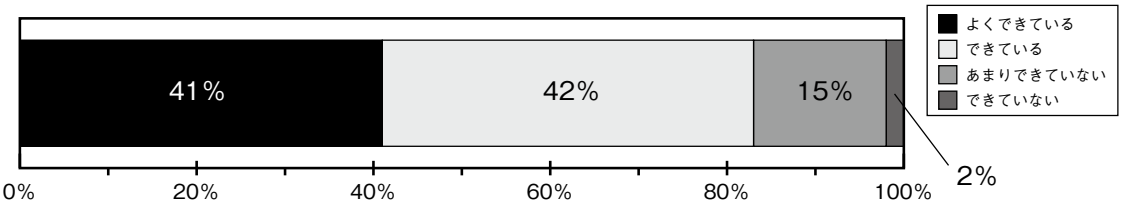
イ　生活習慣の改善

設問の中で特に変容が見られたのは「だれとでもあいさつを交わし、仲よくすることができている」という設問である。「あまりできていない」・「できていない」と答えた児童の割合が減り、「よくできている」・「できている」と答えた児童の割合がその分増えている。児童の意識の高まりが少しずつ見られるようになってきた。

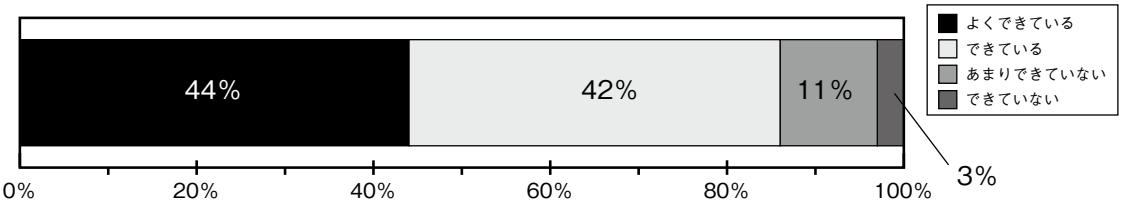
本校では「あいさつ」を生活習慣確立の重点と考えて取り組んできた。従来から、地域

の協力を得てあいさつ運動を実施しているので、この取組については、地域との連携のもと継続するとともに、日々の登校指導でも充実させてきた。

１学期実施のアンケート調査
だれとでもあいさつを交わし、仲よくすることができています



２学期実施のアンケート調査
だれとでもあいさつを交わし、仲よくすることができています



（家庭版「あ･は･は」がんばりカレンダー）

登校指導では、生徒指導主事を中心に毎朝の声かけを実施している。さらに、安全委員会の活動として各月一週間程度あいさつ活動に参加し、元気のよい挨拶ができた班を放送で紹介したり、挨拶を呼びかけるポスターを掲示したりして挨拶に対する意識を高めてきた。

一方、家庭生活における生活習慣の定着については、食生活に関するアンケートや家庭学習についてのアンケート等を実施して結果をまとめ、保護者に知らせて学校と保護者の連携による生活習慣の改善を図っている。その際、家庭生活の意識を高めるために、家庭生活における「あ・は・は」（あさごはん、はや寝・早起き、はたらこう）を自己評価する「家庭版『あ・は・は』がんばりカレンダー」を各家庭に配布して意識付けを行い、生活習慣の定着を図っている。

また、清掃についても「無言清掃」を推進し、落ち着きのある学校生活の確立を図っている。

ウ　関係機関との連携の強化

児童の生活習慣の定着については、保護者との連携を図り改善を図っている。また、いじめにつながる恐れのある携帯電話の使い方については、教師の指導や、関係機関の協力を得て「携帯電話の安全な使い方教室」を実施した。他にも「薬物乱用防止教室」を実施しており、児童の意識は一段と高まってきた。

このような学校の取組や家庭生活の重要性については、関連する情報を家庭に発信し、

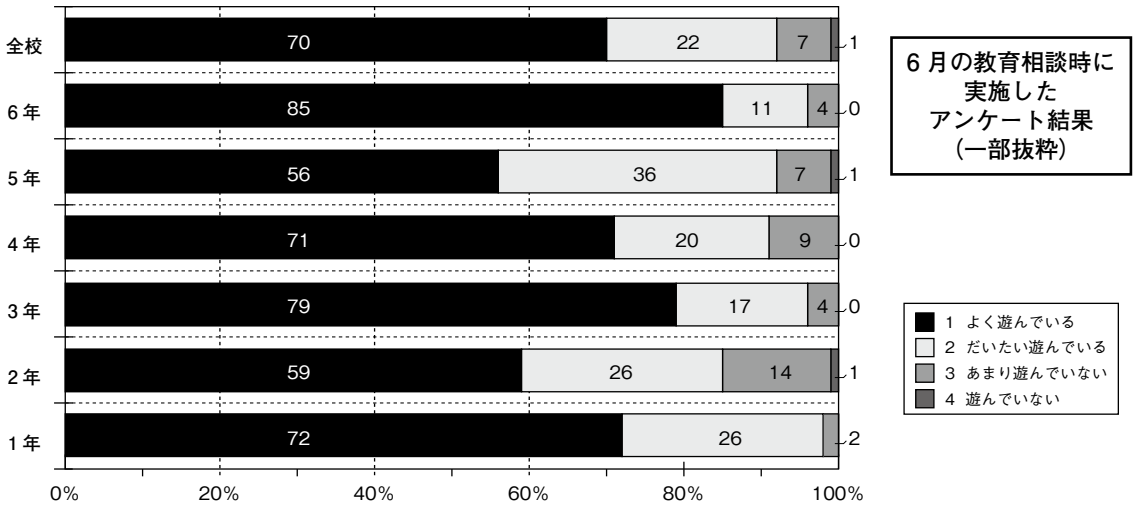
学校や地域、家庭との協力を基本として取り組んでいる。

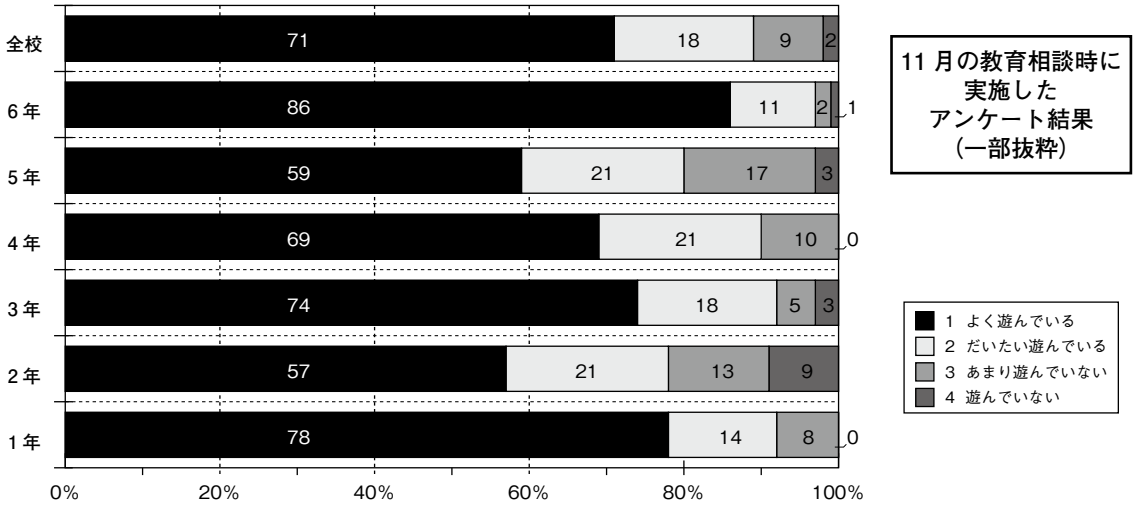
エ　教育相談の充実

本校では、学期に一度、教育相談週間を設定して児童理解に努めてきた。今年度より教育相談の内容を一部改善し、児童理解に一層努めることにした。まず、教育相談の範囲を保護者にも広げ、家庭と学校の連携強化を図った。第１回目は、保護者からの相談が４件あった。学級担任との相談が３件、校長との相談が１件と相談件数は少なかったが、児童理解の深まりが期待されるので継続して実施したい。また、児童に対するアンケートの内容についても改善した。いじめについてストレートに質問する内容であったので表現を変え、答えやすい内容とした。

児童アンケートの結果からは、学校生活が安定してきている様子が伺える。高学年になるにつれて学校生活が楽しいと考える児童や昼休みに外で遊んでいる児童が減少する傾向にあるので、楽しい学校を目指して異学年交流活動（縦割り班活動）等の充実を図り、全ての児童が充実した学校生活を送ることができるように工夫を重ねる必要がある。特に、高学年の児童が存在感や達成感をもつことができるようにしていきたい。

昼休みや中休みには外で遊んでいますか？





Ⅳ　研究の成果と今後の課題

１　集団づくり

○　異年齢集団の活動を通して、高学年は班員の能力や立場を考え、リーダーとして進行しようという意欲が見られるようになった。中・低学年も同学年では経験できない人間関係を感じながら活動している。

○　自己評価カード（「あ・は・は」の診断カード）を活用し、活動を振り返ることにより、めあてを持って次回の活動に生かす実践ができた。

○　子どもの主体性を育成するため、教師はどのようにかかわるべきか研修することができた。

○　全校の児童を全教職員が育てるという意識が高まった。

２　授業づくり

○　授業の工夫では、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルについて研修を深めたことにより教職員の意識が高まり、児童も積極的に授業に参加し考えを深めることができた。今後も系統的な実践を行っていきたい。

○　学習習慣の育成では、「聞く－あいうえお・話す－かきくけこ」の掲示物を全教室に掲示し、朝の会や授業中に活用することにより、全校児童へ意識付けを図ることができた。

○　授業評価の工夫では、アンケートを定期的に取ることにより、自尊感情を高め、相手を思いやる心の育成につながる授業ができているか教員自身が自分を振り返ることができた。今後も継続していく中で、更に成果と課題が見えてくるものと考える。

３　生活づくり

○　児童の実態調査と生活習慣の育成を主な内容として活動に取り組んできた。実態調査については、「『あ・は・は』の診断カード」や「学校生活に関するアンケート」「生活習慣に関するアンケート」など様々なアンケートにより実態を把握し、実践に生かすことができた。また、生活習慣の育成についても、「あいさつ」を中心に取り組み、効果を上げることができた。これまでに実践してきた取組に工夫や改善を施すことで、継続的かつ発展的な取組を展開することができた。

○　家庭や地域と連携した指導については、学校からの一方的な情報の発信になってしまいがちであるため、地域や家庭からの情報をきちんと受け取り、指導に生かしていく手立てが必要である。また、アンケート調査が多岐にわたり、教師もどの結果をどのように受け止め、どのように指導に生かしていくのかがあいまいになった部分がある。アンケート内容をより精選することで、児童の自己評価が生きて次の活動につながっていくと考える。

〈研究推進モデル校〉

西条市立多賀小学校

Ⅰ　本校の概要

本校区は新興住宅地と農村地域が混在し、全般に都市化が進んでおり、児童の出入りも激しい。保護者の教育への関心は高く、教育活動に積極的に協力する保護者も多い。また、愛護班活動、スポーツ少年団活動等も盛んである。児童は、全般的に人なつっこく、素直で明るく活発であり、異学年同士の仲も良い。しかし、根気強さにやや欠け、基本的な生活習慣が身に付いていない児童も見られる。特に挨拶や聴き方・伝え方等、人権尊重を基盤とした生活習慣につながる態度や技能が十分に育っているとは言えない。

Ⅱ　研究の概要

１　研究のテーマ

進んで仲間とつながり合える、心豊かな児童の育成

２　テーマ設定の理由

見えにくくなったといわれるいじめの未然防止のためには、学校や地域社会などの子どもたちの社会性が育成される場を見直すことが必要である。そのために、学級や学年を越えた異年齢間の交流や、学校間の交流を活性化したり、地域や自然と関わる機会を増やしたりすることなどで、相手を思いやる人間関係づくりを推進していきたい。児童の社会性を高めることを通して、進んで仲間とつながり合える、心豊かな児童を育成することを目指し、本主題を設定した。

３　研究の内容

⑴　人権・同和教育の視点を大切にした異年齢間の交流活動の推進

ア　互いの自己有用感を高めるための縦割りを基本とした交流活動

㈠　週１回の縦割り班（元気アップ班）での遊び

㈡　元気アップ班による学校行事等への参加

㈢　隣接する幼稚園との縦割り班による交流

イ　児童が主体となった仲間意識を育てる集団づくりを目指した委員会活動

㈠　人権委員会が中心となった毎日のなかよし遊び

㈡　児童の願いや悩みに応えるなかよしポスト

㈢　みんなで問題を解決していく人権集会

ウ　地域と密着した教育集会所を中心とした子ども会活動

㈠　約20年間続いている毎月１回の活動

㈡　いろいろな体験を中心とした活動

㈢　地域の方々や近隣の高校生との連携

⑵　主体的に学習に取り組み、共に学び、高め合う楽しい授業への改善

ア　児童の興味・関心を高めるための楽しく分かる指導の工夫

㈠　学習習慣の定着化を目指した指導の見直し

(ｲ) 個に応じた指導形態の工夫

(ｳ) 評価カードによる指導に生かす評価の工夫

イ　児童の表現力の育成につながる指導の工夫

(ｱ) 朝のスピーチや話す・聞くスキルを利用した毎日の継続的な指導

(ｲ) 発達段階に応じた週１回の短作文

ウ　実践力や思いやりの心を育てるための道徳教育と特別活動の時間の充実

(ｱ) 他の教育活動との相互関連を図った道徳教育と特別活動の取組

(ｲ) コミュニケーションスキルの定着を目指した指導の工夫（教職員研修と授業研究）

(3) いじめの未然防止に向けた実態調査と教育相談の充実、関係機関との連携

ア　いじめ問題に関する意識調査と教育相談の充実

(ｱ) 児童の社会性やいじめ問題に関する意識調査

(ｲ) 児童理解の充実を目指した特別支援教育の展開

(ｳ) 困難な条件のもとにある児童への教育相談体制の充実

イ　家庭や地域、関係機関との連携事業

(ｱ) 家庭と連携した基本的な生活習慣の定着化を進める取組

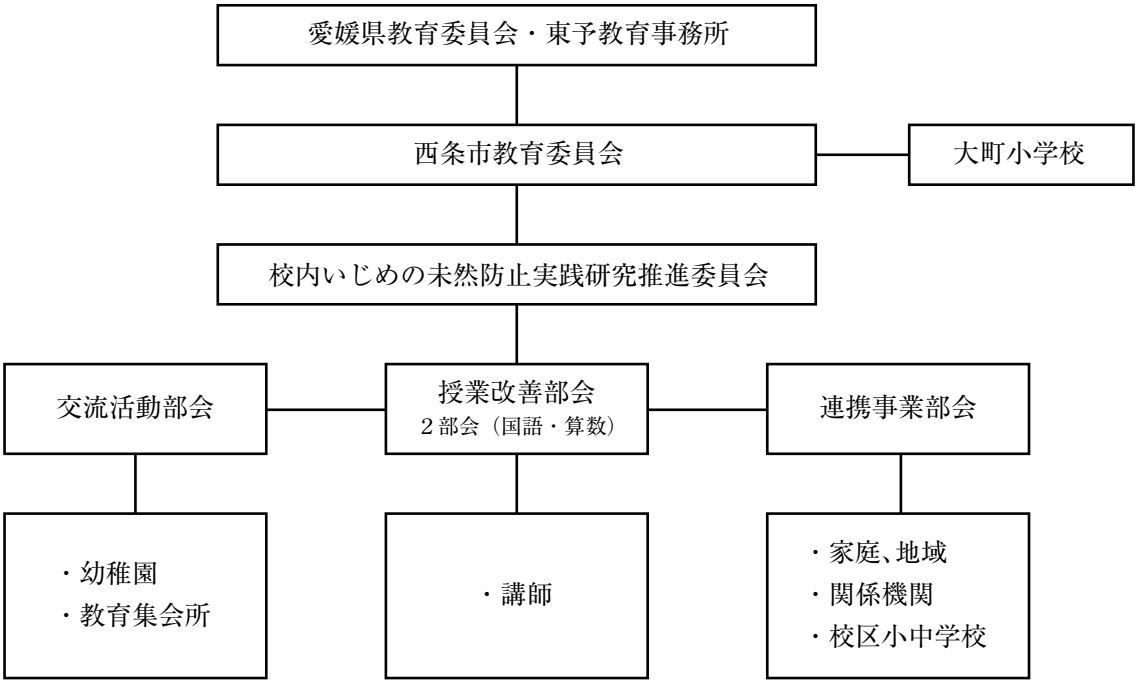
(ｲ) 青少年健全育成センターや青少年健全育成協議会等との連絡会

ウ　保幼小中学校の連携による指導

(ｱ) 保幼小中連携による生徒指導に関する定期的な情報の共有化

(ｲ) 保幼小中連携による指導体制の工夫

４　研究の組織



Ⅲ　研究の実践

1　交流活動部会（互いの自己有用感を高めるための縦割りを基本とした交流活動）

自己有用感とは、「自分自身のよさを認め、自分を肯定的に受け止めることができる存在感」である。自己有用感は、縦割り班で様々な活動をし、声をかけ合ったり、助け合ったりする中で、高めることができる。この自己有用感を高めることによって、相手を思いやり、進んで仲間とつながり合える児童を育てることができると考えている。

⑴　元気アップ班（縦割り班）による学校行事等への参加

ア　さつまいもの苗植え

元気アップ班で、苗植えを行った。苗の植え方が分からない低学年の児童に、高学年の児童が優しく声をかけたり、いっしょに植えたりしていた。なかよし委員会が全校に呼びかけて畑の名前を募集したところ、多数の応募があり、「さつまいも共和国」に決定した。畑の看板も作成した。児童は畑に行くのを楽しみにして、夏の暑い中でも水やりや草引きに意欲的に取り組んでいた。

（苗植え）

イ　やきいもパーティー

秋にはさつまいもの収穫を行った。大きいいもは４、５人で力を合わせて掘るなど、協力する姿がたくさん見られた。その後、自分たちで育てたさつまいもで、やきいもパーティーを実施した。学年ごとに役割を分担し、準備をした。やきいもが焼けるまでは、各班で決めた遊びを楽しんだ。自分たちで協力しながら育てたさつまいもの味は、格別だったようだ。

ウ　運動会（Never give up）

運動会の演技では、班で一列に並び、ボールを送る競技を行った。班毎に並び方やボールの送り方を工夫し、一秒でも速く送ることができるように練習に取り組んだ。協力して練習することを通して、班の団結力を深めることができた。

（Never give up ）

エ　青空給食

秋の好天に恵まれ、運動場で青空給食を行った。異学年での給食は、初めてのことだったので、普段と違うメンバーで食べることができたので、子どもたちは大喜びだった。

⑵　週１回の元気アップ班での遊び

定期的に活動することで班員の仲も深まると考え、週１回チャレンジタイム（業間活動）に縦割り班活動を取り入れた。一学期には、班で計画を立て、いすとりゲームや新聞乗りゲーム、フルーツバスケットなどの屋内での遊びを楽しんだり、おにごっこやドッジボールなどの屋外での遊びを楽しんだりした。二学期には、班対抗でスローアンドキャッチラリーや長縄をした。スローアンドキャッチラリーでは、相手の名前を呼んでボールをパスし、班の

メンバーの顔と名前をしっかり覚えることができた。相手が取りやすいボールを投げることを一人ひとりが意識することで、どの班も自分たちの記録を伸ばすことができた。長縄では、苦手な児童に対して、「跳べるよ」「ドンマイ！」などと声をかけたり、アドバイスしたりする児童が目立った。リズムよく跳べるように「はい、はい」と大きなかけ声をかけている班もあり、チームワークのよさを感じることができた。

⑶　なかよし集会

これまでの元気アップ班の活動を振り返り、感想を発表したり、班対抗ゲームの「ヒューマンチェーン」を行ったりした。集会の最後に、６年生の児童が作詞をした「My best friend」を全校で合唱した。

以下が、その時の感想である。

- １年生より上の人がやさしくボールをなげてくれて、とってもうれしかったです。おねえさん、おにいさん、ありがとう。（１年）
- ネバーギブアップのとき、がんばれと言ってくれました。とてもとてもうれしかったです。また、私も言ってみたいです。（１年）
- はじめは元気アップはんで、友だちは全然いなかったけど、ゆう気を出してしゃべってみたら、３年生にたくさん友だちができてよかったです。（２年）
- ぼくは、元気アップはんで新しい友だちがふえるのがすきです。また、元気アップはんで何かやりたいです。（３年）
- 友だちが「続けて入れなくていいから、とぶことだけを考えていたらだいじょうぶ。」と言ってくれたので、その言葉がゆう気になって、とても上手にとべました。（３年）
- これから、もっといっぱい友だちをつくって、いろいろなお話をしてみたいです。（４年）
- はんで協力することはとても楽しかったです。（４年）
- いもほりで、大きいいもをほっているときに、６年生の男子が手伝ってくれました。私も１年生と３年生を手伝いました。（５年）
- １年生は大きな声を出して、２年生は１年生に負けないように頑張って、３年生は１・２年生の手本になって、４年生は上級生らしく本気で頑張って、５年生は６年生を助けて、それを６年生がまとめることができたと思います。（６年）
- 私は元気アップでのいろいろな行事をみんなが楽しめるようにできたと思います。６年生として、積極的に声をかけ、困っている子がいれば助けることができたと思います。声をかけて教えると、その後からは、笑顔で行事に参加できていたので、「あーよかったな。」と思うことが何回も何回もありました。（６年）

低・中・高学年それぞれの立場で、班のみんなで取り組んで楽しかったことやよかったことを交流することができた。自分も友達も大切にされていることを感じることができ、とても温かい集会になった。特に下級生が喜んでいる様子を見て、それまでの活動をリードしてきた高学年がうれしそうにしていたのが印象的だった。

⑷　掲示の工夫

すべての活動の後には感想を書き、それを掲示コーナーに掲示することによって、それぞれの思いを共有することができるようにした。

（元気アップ班　掲示コーナー）

２　授業改善部会（実践力や思いやりの心を育てるための道徳教育と特別活動の時間の充実）

⑴　学級活動での実践（第２学年）

ア　単元名　　みんななかよし

イ　本時の指導

㈠　ねらい

相手の気持ちを考えたり、ロールプレイをしたりすることで、気持ちのよい誘い方や返事の仕方を身に付け、進んで仲間とつながり合おうとする態度を育てる。

㈡　準備物　ワークシート　挿絵

㈢　展開

学習の流れ	・　指導上の留意点　○　評価
1　前時の復習をする。	・　話しかけるときに大切なポイントを想起させ、本時の学習へとつなげる。
2　本時の課題を知る。	
あい手がうれしいさそいかたやこたえかたをかんがえよう	
3　気持ちのよい誘い方を考える。	
⑴　どんなふうに友だちを誘うか発表する。	・　日頃、どのように声を掛けているか自由に発表させる。
⑵　３つの場面を提示し、誘われた側の気持ちを考える。	・　誘い方による相手の気持ちの違いに気付かせ、相手の気持ちを考えるようにする。
⑶　二人組になってロールプレイをする。	・　よい誘い方を理解させ、４つのポイント（近づく、きちんと見る、聞こえる声で、笑顔で）を踏まえてロールプレイをさせ、実践力を養う。
⑷　実際にやってみた感想を発表する。	・　シェアリングをし、感想や気付きを共有する。
4　気持ちのよい答え方を考える。	
⑴　気持ちのよい断り方を考える。	・　断るときにも、相手の気持ちを考えた答え方をすることが大切であることをおさえる。
⑵　二人組になってロールプレイをする。	・　場面を設定し、ロールプレイをさせる。
⑶　実際にやってみた感想を発表する。	・　シェアリングをし、感想や気付きを共有する。
5　今日勉強したことを使って、「木とりす」ゲームをする。	・　「入れて」「いいよ」や「一緒に遊ぼう」「いいよ」など声をかけたり、それに答えたりしながら活動するというルールを決めておく。 ○　気持ちのよい誘い方、答え方ができているか。【観察】
6　感想を書いたり、発表したりして本時の振り返りをする。	・　感想を共有するとともに、相手の気持ちを考えて誘ったり、答えたりする必要があることをもう一度おさえる。 ○　相手の気持ちを考えた誘い方や答え方が分かったか。【ワークシート】

⑵　人権・同和教育に視点を当てた参観授業での実践

本校でも、人の話が静かに聞くことができない、子ども同士のトラブルが多発する、キレやすく自分の感情をおさえられない、いじめや不登校の問題等が課題となっている。そこで、人権・同和教育に視点を当てた参観授業で、子どもたちの社会性の育成を目指したソーシャルスキル（他の人たちとよい関係を築くための具体的な力）トレーニングの授業を行った。授業では、このような場面では、いったいどのように行動すれば、みんなで楽しく仲よく生活できるようになるのか、という具体的な解決方法や適切な言動について、みんなで学習することができた。

（ソーシャルスキルトレーニング）

児童の感想（３年生児童） 最初ははずかしかったけど、やってみると楽しかった。困っている人を助けるときには、相手に近づく、相手をしっかり見る、相手に聞こえる声で言うなどのポイントがあることを勉強できてよかった。困っている人を助けたら、相手も気持ちがよくなるし、自分も気持ちがよくなると思う。
保護者の感想 「困っている人を助ける」というテーマの学習であったが、ロールプレイを通して、相手の気持ちを考えながら、手助けの方法を考えることができていた。参観している私たちにもすぐに実践できる内容だったので、そのことを実生活の場面でも生かしていきたいと思う。

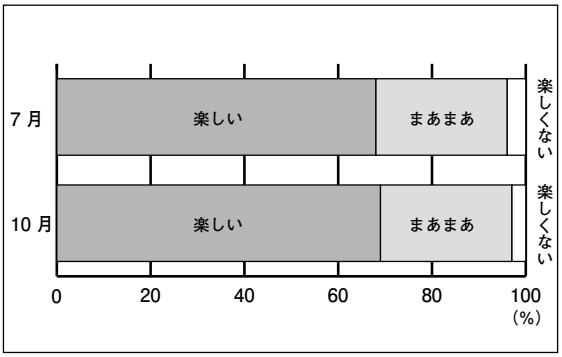
３　連携事業部会（いじめ問題に関する意識調査と教育相談の充実）

今年度も、いじめ問題に関する児童の意識調査を毎月行い、教育相談等の指導に生かしてきた。また今年度は、児童に対して、基本的な生活習慣で問題となっている内容についてのアンケートを実施した。併せて、保護者に対しても、いじめ問題に関する意識や規範意識等を調べるアンケートを実施した。他にも、部会を中心にアンケート結果を分析し、明らかになった課題を解決するためにいろいろな方策を実践した。

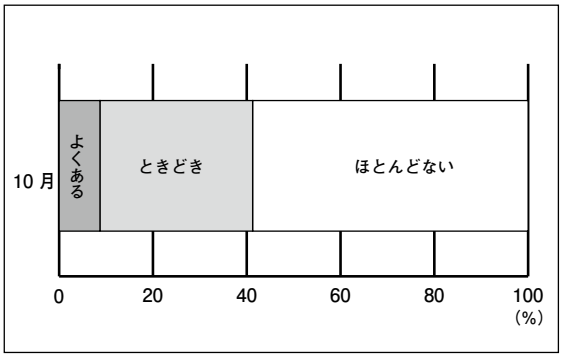
⑴　児童の社会性やいじめ問題に関する意識調査

ア　児童用アンケート集計結果（一部抜粋）

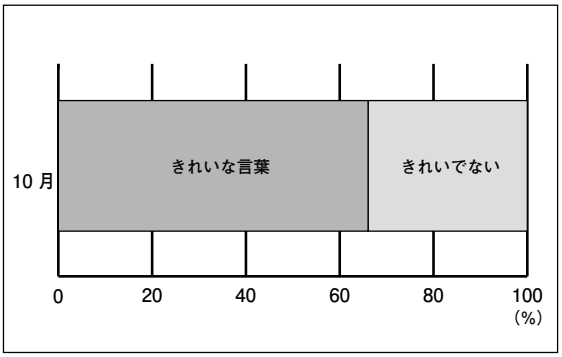
１　学校での生活は楽しいですか。



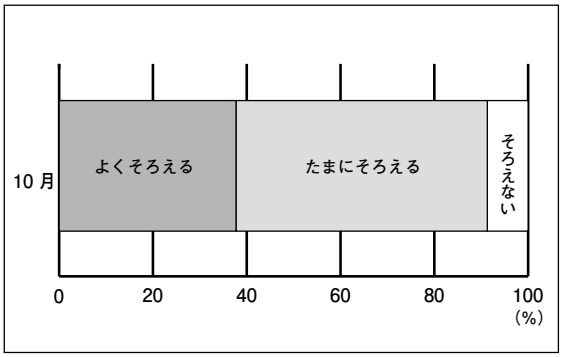
２　あなたは学校に行きたくないと思うことはありますか。



３　あなたは自分できれい（ていねい）な言葉遣いをしていると思いますか。保護者や先生から注意されることはありませんか。



４　他の人が使ったスリッパをそろえることはありますか。

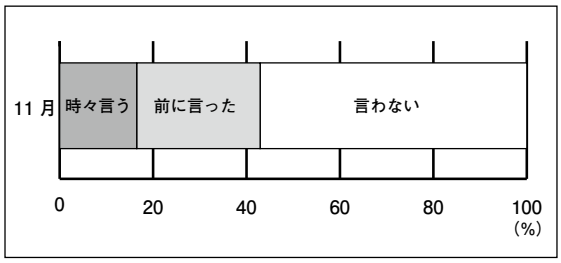


アンケートの結果を見ると、ほとんどの児童は学校生活は「楽しい」と答えている。しかし、わずかではあるが「楽しくない」と回答した児童もいる。また、４割近くの児童が学校に行きたくないと思ったことがあるようである。その理由には、体のことや勉強のこと等いろいろなものが挙げられていたが、友達関係の悩みというものが多かった。

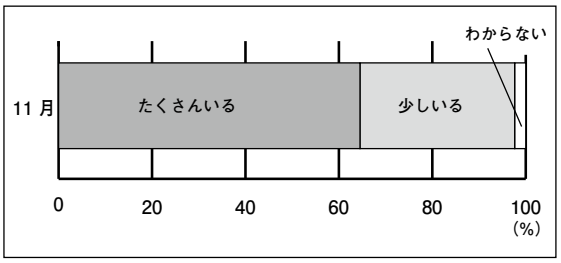
規範意識の面では、乱暴な言葉遣いや相手を傷つける言葉遣い等、まだまだ友達や相手に対する言葉を大切にする意識が育っていないように感じられる。しかし、「トイレのスリッパをそろえる」や「あいさつをする」「廊下の右側通行」等は、生活委員会を中心とした活動により、児童への意識の高まりが見られるようになり、以前より良くなってきている。

イ　保護者用アンケート集計結果（無記名　調査人数186人　一部抜粋）

１　子どもが「学校へ行きたくない」と言うことはありますか。



２　子どもには友だちがいますか。



３　もしも子どもの友だちがいじめを受けているのを知ったら、あなたはどうすると思いますか。次の中からあてはまるものを選んでください。（いくつ選んでもかまいません。）

（１）いじめている子どもに注意する
（２）いじめている子どもの親に連絡する
（３）いじめを受けている子どもの親に連絡する
（４）学校や教師に連絡する
（５）警察や補導員に連絡する
（６）いじめホットライン等の公的機関に相談する
（７）特になにもしない

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
合計	40	10	39	152	2	13	11

４　子どもの友だちが次のようなことをしていたら、どの程度悪いことだと思いますか。次の中からあてはまるものを一つ選んで番号に○をつけてください。

１　とても悪い　　２　かなり悪い　　３　あまり悪くない　　４　まったく悪くない

（１）人に暴力をふるう　　1　2　3　4
（２）友だちにお金や品物を強要する　　1　2　3　4
（３）夜７時以降出歩く　　1　2　3　4
（４）カッターナイフを持ち歩く　　1　2　3　4
（５）自転車の二人乗りをする　　1　2　3　4
（６）友だちの物を無断で使う　　1　2　3　4
（７）ジュースの空き缶などを放置する　　1　2　3　4
（８）道路にべた座りをする　　1　2　3　4

	(1)				(2)				(3)				(4)			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
合計	150	34	2	1	177	9	0	1	75	94	18	0	160	21	5	1
	(5)				(6)				(7)				(8)			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
合計	44	107	36	1	83	95	10	0	67	111	9	1	41	96	50	1

５　あなたは、普段地域の子どもたちに対して、どのように接していますか。次の中からあてはまるものを選んでください。（いくつ選んでもかまいません。）

（１）道であったとき声をかけたり、あいさつをしたりする
（２）悪いことをしていることに気付いたとき、注意したり、しかったりしている
（３）愛護班活動（子ども会）等で一緒に地域の活動をしている
（４）言葉遣いや態度が悪かったら注意している
（５）文化的活動やスポーツの指導等をしている
（６）困っているときや悩んでいるときに相談にのっている
（７）子どもたちのボランティア活動の指導をしている
（８）特にかかわりはない
（９）その他（　　）

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)
合計	151	82	53	46	8	16	1	19	3

６　今の小学生を見て、優れている面をあげるとすればどのようなことだと思いますか。次の中からあてはまるものを選んでください。（いくつ選んでもかまいません。）

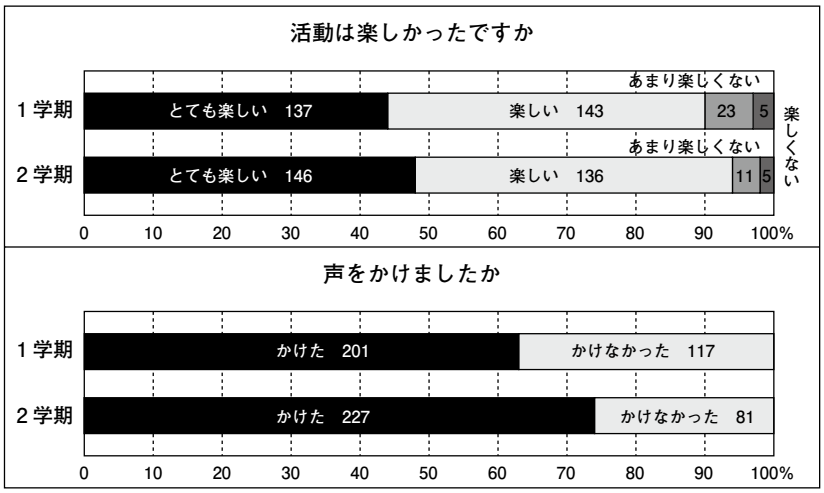
（１）自由にのびのび振るまえる
（２）現実的である
（３）自分の考えをはっきり言える
（４）個性や独自性を大切にしている
（５）国際感覚が豊かである
（６）感性が豊かである
（７）実行力や行動力がある
（８）社交性や協調性がある
（９）ボランティア活動に積極的に参加する
（10）粘り強く物事をやりぬく
（11）思いやりに富む
（12）特にない
（13）その他（　　）

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)
合計	58	76	50	45	11	32	16	20	3	12	15	23	5

質問項目１，２ともに保護者の意識と児童のアンケート結果はよく似ている。質問４では、保護者の規範意識にばらつきを感じる。挨拶や愛護班活動等の地域との関わりについては、高い意識レベルであったが、交通ルールやマナーに関しては、保護者の意識の低さを感じる。

Ⅳ　研究の成果と課題

１　人権・同和教育の視点を大切にした異年齢間の交流活動の推進について



左の一学期と二学期の活動を振り返ってのアンケート結果からは、「とても楽しい」「楽しい」の児童が増えており、異学年で遊ぶことの楽しさを知ることができた。また、その遊びを通して、相手のことを考えた声かけができるようになってきた。その他の成果と課題については、次の通りである。

○　高学年の児童は、いろいろな場面で低学年の児童のことを思いやる言動が見られるようになり、リーダーとしてどうしたらみんなで楽しく遊ぶことができるのかを考えるようになった。また、低学年の児童は、高学年の児童にやさしくしてもらうだけでなく、グループの一員として、低学年の児童なりにできることを考え、協力して活動に参加することができた。

○　縦割り班で遊ぶ楽しさだけではなく、みんなで協力して、何かを成し遂げることの喜びを感じ取ることができ、児童の自己有用感の高まりと、他者への豊かな関わり合いの深まりが見られた。

○　昼休みに高学年と低学年が一緒に楽しく遊ぶ姿がよく見られるようになってきている。今後は、子どもたち同士で「こんなことがしたい」というアイディアを出し合い、より児童の

自発的な活動になるようにしていきたい。

２　主体的に学習に取り組み、共に学び、高め合う楽しい授業への改善について

特に、実践力や思いやりの心を育てるための道徳教育と特別活動の時間の充実の中でも、コミュニケーションスキルの定着を目指した指導の工夫に焦点を当て、研究を進めてきた。その取組の成果と課題は、次の通りである。

○　モデリング、ロールプレイ、シェアリングという、ロールプレイの流れが有効である。また、ロールプレイには、いろいろな人といろいろな条件で、繰り返し行うことで、自分にとって一番いい方法を見つけるという方法もある。いろいろな学習に取り入れ、繰り返し練習することにより、実践に結びつくであろう。

○　子どもの感想には、日々の自分を振り返り、これからどうするかが書かれている。コミュニケーションスキルの定着を目指して学習しているが、生活の中でのトラブルが減ってきている。また、友達の良いところ探しをする中で、みんなから認められていることを感じているようである。

○　学習指導要領「特別活動」に、「望ましい人間関係の形成のため、社会的スキルを身に付けさせる」ということが、明記されている。表現力が未熟なために、自分の気持ちをうまく伝えることができない子どもも増えてきている。以前なら、日々の暮らしの中で自然と身に付いていたソーシャルスキルを、学校で底上げする必要がある。

○　多方面からコミュニケーションスキルについて考えていきたいが、まずは、子どもの実態を考えながらコミュニケーションスキルを学んでいく必要がある。ソーシャルスキルの学習を続けることで、枠に入った子どもを育てることにならないかという心配もある。その枠からさらに一歩進んで、ソーシャルスキルを捉えていく必要がある。

３　いじめの未然防止に向けた実態調査と教育相談の充実、関係機関との連携について

○　いじめ問題に関する児童の実態や意識調査から気になる内容については、随時教育相談や学級等での話合いを行うことにより、その問題の解決を図ることができたり、児童の心の変容も感じたりすることができた。

○　愛護班活動やＰＴＡの生活活動部会等でも、気持ちの良いあいさつの呼びかけを行ううちに、地域の方からも積極的に声をかけていただけるようになり、子どもたちの意識が少しずつ高まってきた。

○　基本的な生活習慣の定着化を図るために、規範意識の向上を目指して取り組んできたが、まだ十分とはいえない。これからも、教職員、保護者、地域の方々の共通理解を図りながら、実践を行わなければならない。

「進んで仲間とつながり合える、心豊かな児童の育成」をテーマに研究を進めてきた。研究の内容は、新規の取組や実践と言うよりも、そのほとんどが、これまで行ってきた様々な取組や実践を点検し、改善して取り組んだものである。振り返ってみると、これまでもいじめ問題の解決のためにいろいろな取組を行っているのだが、その取組の評価やそれをもとにした改善が不十分であった。そのために、いろいろな取組に対する明確な目標が設定できていなかったように思う。本校にとっては、今年度の研究はとてもいい機会になった。今年度の研究の成果と課題を踏まえ、来年度も研究や改善を深めていきたい。

〈研究推進モデル校〉

愛南町立東海小学校

Ⅰ　本校の概要

１　校区の概要

本校は愛南町の南東部に位置し、 深浦湾の最も奥にある全校児童数46名の小規模校である。学校は惣川の河口に位置し、リアス式海岸特有の、平地が少なく山が背後に迫っている地域にある。校区は広く、宿毛湾沿いの県道を通ると、高知県宿毛市に行くことができる。

地域住民や保護者の学校に対する関心は高く、これまでも学校の授業や行事等に積極的に参加するなど、連携・協力体制が整ってきている。

２　児童の実態

学級数は三つの特別支援学級を含む８学級で、第３・４学年は複式学級である。なお、東海保育所が隣接している。

年・組	１年	２年	３年	４年	５年	６年	２組	３組	４組	合計
男（人）	6	2	3	4	6	2	1	1	1	26
女（人）	3	3	1	4	3	4	0	2	0	20
合計（人）	9	5	4	8	9	6	1	3	1	46

本校は、素直で明るい児童が多く、学校ではこれまで、深刻ないじめや生徒指導上の大きな問題は起こっていない。しかし、中学校への進学により、小学校では経験しなかった人間関係に関わる問題に直面することも起こっている。小学校の段階から集団の中で、お互いを認め合い、望ましい人間関係を築いていく力を付けさせたいと願っている保護者は多い。

Ⅱ　研究の概要

１　研究テーマ

互いに認め合い、心豊かに生きる児童の育成

～いじめの未然防止を目指して～

２　テーマ設定の理由

小規模校であるため、教師は一人ひとりに目が届きやすく、児童の小さな変化にも気付くことができる。また、児童は地域でも温かく見守られながら生活しており、地域で生徒指導上の問題が起きても、学校に情報が入り、大きな問題行動などが起きる前に指導することもできている。

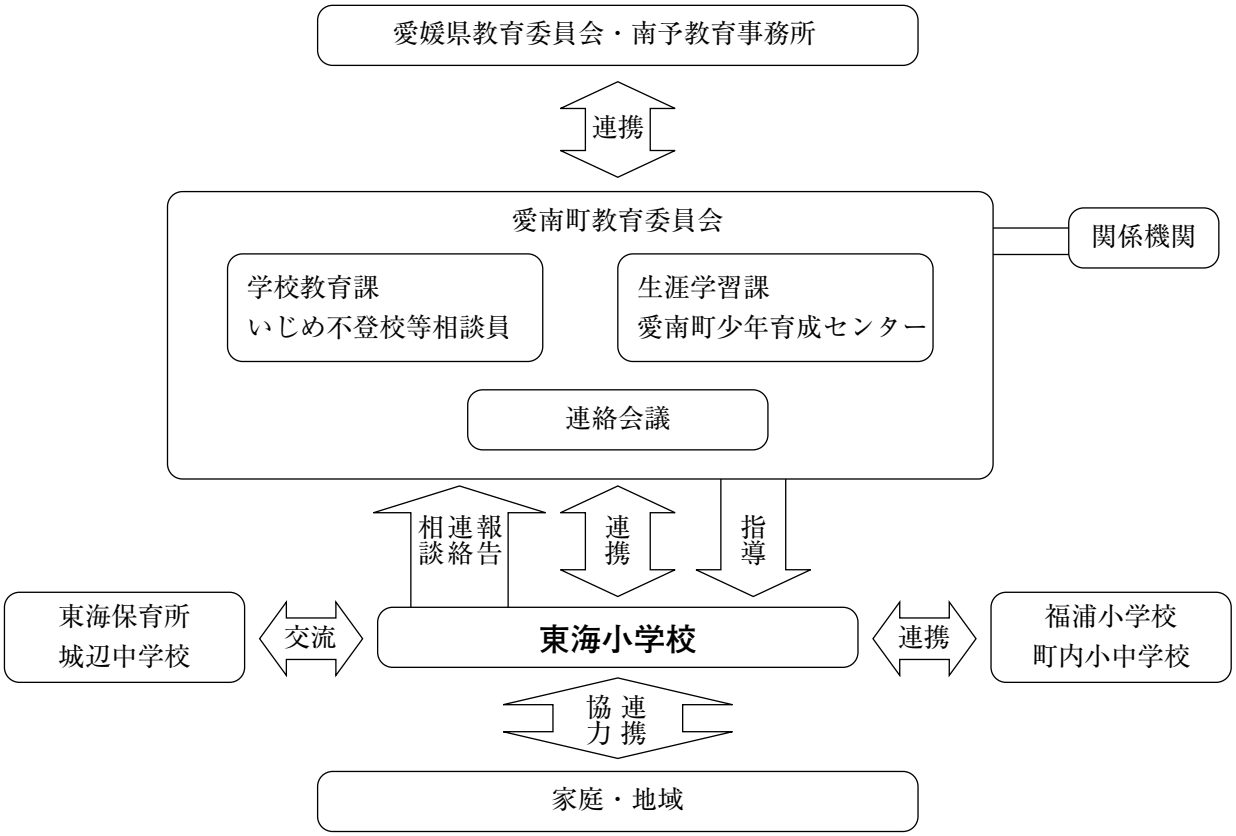
しかし、少人数のデメリットもある。小学校の中でも、人間関係が固定されがちで、一旦人間関係がこじれると修復されにくい。また、中学校への進学後、多人数の中で新たな人間関係をつくることを苦手にしたり、必要な自己主張ができなかったりして悩んでいる子どももおり、コミュニケーション能力、更には困難を乗り越える力や自立心が十分に育っているとは言えない。

本校においても、思いやりに欠ける言動や固定化された人間関係によるトラブルやいじめが

発生する可能性があるという現状をしっかり認識し、その未然防止に向け、学校全体で取り組んでいかなければならない。

そこで、小規模校であることの利点を生かし、保育所や中学校、家庭・地域と連携した多様な交流活動や異年齢交流を進めることで、相手を思いやり、望ましい人間関係を構築する力を身に付けさせたいと考えた。そして、児童の社会性を高めるとともに心豊かに生きる児童を育成することを目指し、本主題を設定した。

３　調査研究の推進組織体制



Ⅲ　研究の実践

１　よりよい人間関係を育む教育活動の推進

⑴　保育所・中学校・家庭・地域との連携・交流

ア　地域における推進体制の確立

学期ごとに１回、公民館を会場に「児童生徒をまもり育てる会」が実施されている。地域の民生児童委員、老人クラブ代表者、学校関係者評価員、駐在所長、公民館長、中学校教員、ＰＴＡ役員、本校教職員が出席し、本校児童の健全育成について、主に生徒指導面からの意見等を交換できる地域との交流の場である。

〈連携会議の様子〉

１学期は、この会の中で、いじめの未然防止実践研究支援事業について、本校の取組内容や計画について説明し、地域の理解、協力を呼びかけた。また、２学期以降も、本校の

児童のいじめに関するアンケート結果と対応について説明するとともに、地域の方から質問や意見を聞き、その対応について説明した。具体的には、アンケート結果から「学校に行きたくないと答える子どもの理由は何か」「いじわる・嫌がらせといじめとの違いは何か」など、具体的場面での教師や子どもの言動についての質問があった。いじめの未然防止のためにも地域において、児童への声かけや悪いことをしていたときにはきちんと叱るという指導を行っていくことを確認した。

イ　保育所との連携・交流

保育所が隣接しており、これまでも多くの行事で交流してきた。今年度も相撲大会の応援、運動会の合同実施、生活科の秋フェスティバルへの参加、１日体験入学等を通して交流し、児童は保育園児と関わってきた。

〈保育園児との交流〉

今年度１学期には１年生が保育所へ行き、一緒に遊ぶ時間を過ごし、交流を図った。高学年では、保育園児との交流の仕方を事前に学級で学習することにより、言語発達をはじめとするコミュニケーション能力が未発達な保育園児にも優しい声かけができるよう、児童に事前指導を行った。このことにより、スムーズに交流ができるようになってきた。

〈学習発表会案内〉

また、保育所の先生に授業参観に来てもらったり情報交換したりするなどして、児童理解を深めた。

ウ　中学校との連携・交流

本校では、毎年運動会に本校出身の中学生に招待状を出し、参加を呼びかけている。この取組は子どもたちにも浸透しており、当日には多くの中学生が来校する。児童の手が足りない時には係の仕事を手伝ったり、ともに競技をしたりして、運動会になくてはならない存在となっている。日頃から中学生に話しかけたり、自然に交流したりすることができている。

〈先輩と語る会〉

今年度は、さらに「先輩と語る会」を計画し、城辺中学校の協力を得て実施した。６年生の児童にとって、中学校への進学は期待とともに不安も大きい。事前に質問を考えさせると、部活動や教科担任制、先輩との接し方など多くの事項が挙がった。当日、少し緊張しながらも明るい雰囲気で交流ができた。中学生との構成的グループエンカウンターのエクササイズを行った後、中学校生活についての質問を行い、中学校の話などを詳しく聞くことができた。６年生の様子から、中学校生活に向けて希望を抱くことができたようである。

エ　地域との交流

(ｱ)　地域との交流学習・行事について

本校では、年間を通して地域とのつながりをもって進める学習や行事が多くある。どの学習・行事においても地域の方と接し、交流するなかで児童は、信頼関係を築いてきている。

月	学習・行事等	学年	交流対象	備　　考
4月	入学式	全校	地域	地域の方の参列
8月	デイサービス体験	6年	高齢者	公民館、中玉地区高齢者との交流
9月	校内相撲大会	全校	地域	地域の方の参観、老人クラブのぼんぜん作り、婦人会のかき氷奉仕
	小学校・地区合同運動会	全校	地域	運動会の合同実施
10月	ふれあい集会	全校	高齢者 婦人会	老人クラブ、婦人会の協力
	郷土料理教室	5・6年	漁協婦人部	鯛の刺身、塩釜などの料理づくり
11月	秋フェスティバル	1・2年	地域	児童の祭りや出店などの催し
12月	学習発表会	全校	地域	劇や出し物の発表
	しめ縄づくり	全校	老人クラブ	公民館、岩水老人クラブとの交流
1月	七草がゆの会	全校	婦人会	採った七草の調理、説明、会食
	校内マラソン大会	全校	婦人会 地域	地域の方の参観、 婦人会によるぜんざい会
3月	卒業式	全校	地域	卒業生がお世話になった地域の方を招待、地域の方の参列

(ｲ) ふれあい集会

地域の高齢者と、ものづくりや遊びで触れ合い、尊敬と感謝の気持ちをもたせることをねらいとして実施している。老人クラブ等との事前打合せ会をもち、今年度の種目を決め、児童に希望をとって、参加種目を決定している。

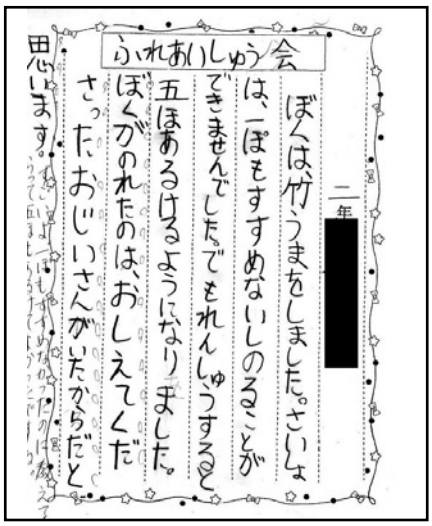
毎年行っている行事であるが、今年度、児童一人ひとりに交流のめあてをもたせたり、「してみたい話」を決めさせたりしておくことで、人と関わる力を向上させたいと考え、事前指導を徹底した。

当日は、高齢者と楽しく触れ合う姿が見られ、各自のめあての達成率もほぼ100%だった。また、事後の作文から感謝の気持ちをもつことができたことが分かる。

【児童のめあて】（抜粋）
- 敬語を使いたい。
- おじいさん、おばあさんの気持ちを考えてふれあうようにする。
- いっぱい話がしたい。　など

【話してみたいこと】（抜粋）
- どうやったら、きれいに（おもちが）つくれるのですか。
- 子どものころ、一番好きだった遊びは何ですか。
- どうやって竹馬を習ったのですか。　など

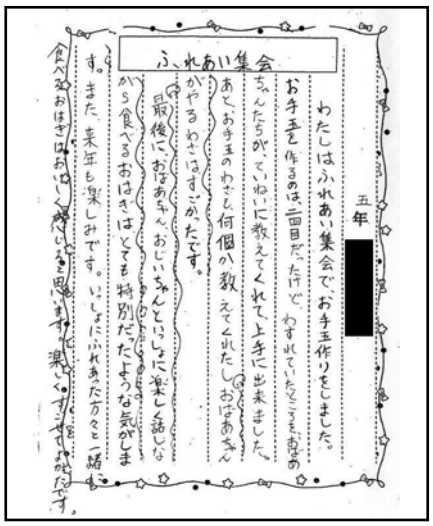
〈ふれあい集会の様子〉



ふれあいしゅう会

二年 [redacted]

ぼくは、竹うまをしました。さいしょは、一ぽもすすめないしのることができませんでした。でもれんしゅうすると五ほあるけるようになりました。ぼくがのれたのは、おしえてくださったおじいさんがいたからだと思います。



ふれあい集会

五年 [redacted]

わたしはふれあい集会でお手玉作りをしました。お手玉を作るのは、二回目だったけどわすれていたこともあるけどちゃんたちがていねいに教えてくれて、上手に出来ました。あとおきまのわさし何個か教えてくれたしおばあちゃんかやるわさはすごかったです。最後におばあちゃんおじいちゃんといっしょに楽しく話しながら食べるおはぎはとても特別だったような気がします。また、来年も楽しみです。いっしょにふれあった方々と一緒に食べるおはぎはおいしく感じると思います。楽しくすごせてよかったです。

〈ふれあい集会　短作文〉

(ｳ)　高齢者デイサービスへの参加

公民館活動の「東海ウォッチング～身近な福祉の仕事～」と合わせ、夏季休業中に６年生が、高齢者デイサービスの体験をした。校区内の中玉地区に行き、町の社会福祉協議会職員と共に、高齢者と交流した。児童は、いろいろな活動を楽しみながら、高齢者とのつながりができたと喜んでいた。中玉地区の高齢者は、ふれあい集会へ参加してくださった。また、３月には卒業式へ招待する予定である。

(2)　校内における交流の推進

ア　特別支援学級児童との交流及び共同学習

本校には、特別支援学級が３学級ある。相手を思いやる心、相手の立場に立って行動する力を育てるために、特別支援学級児童と通常の学級の児童との交流を積極的に行っている。

〈地区の高齢者と交流〉

(ｱ)　交流学級との交流及び共同学習

特別支援学級の児童は全員、朝の会、給食、清掃、全校集会等の活動を交流学級の児童と共に行っている。また、教科等の学習についても児童の実態に合わせて共同学習を行っている。

特別支援学級の児童と通常の学級の児童は、入学時から一緒に学習をしており、協力し合って学習に取り組む様子が見られる。交流学級の児童も自然に手を貸すなど相手の立場に立って行動する力が身に付いてきている。

(ｲ)　休み時間や昼休みでの交流

休み時間や昼休みは、特別支援学級に同学年の児童だけでなく他学年の児童も遊びに来ており、特別支援学級の児童のペースに合わせて教室内で一緒にゲームをしたり、遊んだりしている。また、特別支援学級の児童が運動場など教室外に出たり、移動したりしている時にも、お互いが声を掛け合い一緒に遊ぶことも多い。このように学校生活の中で相互のふれあいが自然に行われている。

〈昼休みの様子〉

(ｳ) 全校集会や学校行事での交流

１学期に保護者の了解のもと、特別支援学級や活動内容についての理解を深めようと、一人ひとりの様子や実態について全校児童に知らせ、どんな支援をすればよいか、具体的に説明する機会を設けた。日頃から車椅子を押したり、声をかけて励ましたりする児童は多いが、それが本校児童全員の意識、行動へ結び付くよう更に支援していく必要がある。

学校行事や縦割り班活動においても、一緒に活動することが当たり前となっている。

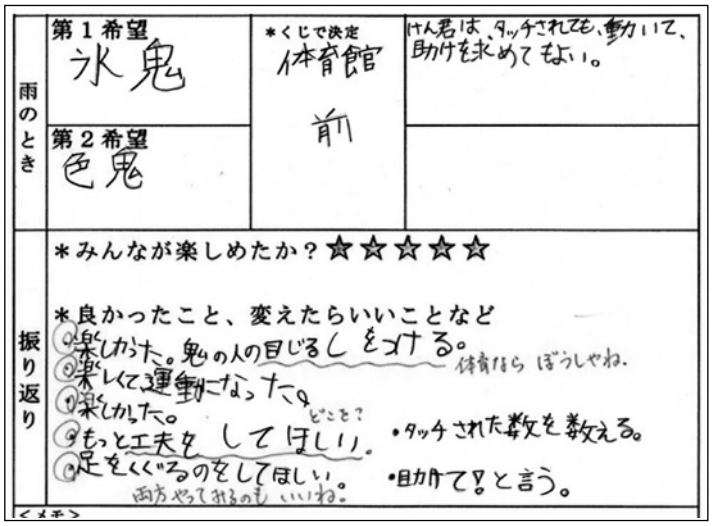
イ　全校集会活動での異年齢交流

教育相談週間（各月第２週）の水曜日の集会（13:45～14:00）を「なかよし集会」とし、児童の企画・運営で自由に遊ぶ時間を設定してきた。前年度までは、学級単位で学級担任と共に遊ぶ活動を行ってきたが、今年度は、異年齢集団での活動を重視し、縦割班で行うこととした。

毎日の清掃だけでなく、遠足や運動会といった学校行事や月に１回の縦割班対抗ゲーム大会などで、共に活動する機会が多く、気心の知れた仲間である。どの児童も「なかよし集会」を楽しみにし、汗びっしょりになりながら時間いっぱい遊んでいた。しかし、人間関係が固定化しているため、上下関係が見られたり、相手を思いやることができなかったりする場面も見られた。そこで、活動の終了時に「みんなが楽しめたか」という観点で、振り返りをすることにした。これまでは、自分が楽しめればいいという考えだったのが、「ボールに触れない人がいた」「１年生と力の差が大きいので、特別ルールを決める」「３組さん（肢体不自由学級）と、もっと遊びたい」など、他の人のことを考える意見が出るようになった。

自分たちで気付き考える、自分たちの本音を出し合う、そんな児童主体の活動を大切にするため、教師は関わり過ぎず、活動や話合いはできるだけ児童に任せた。教師は活動を見守りながら、よかった点を褒めること、班長が自信をもって活動できるよう事前事後に打ち合わせを行うことに重点を置いた。休み時間や休日にも、異学年で自然に遊ぶ姿が見られる。遊びによって身に付く力は、やはり大きいものがあることを、実感することができている。

〈「なかよし集会」の様子〉



雨のとき
第１希望　氷鬼
第２希望　色鬼
＊くじで決定　体育館前
けん君は、タッチされても、動いて、助けを求めてもよい。

振り返り
＊みんなが楽しめたか？☆☆☆☆☆
＊良かったこと、変えたらいいことなど
楽しかった。鬼の人の目じるしをつける。　体育ならぼうしやね。
楽しくて運動になった。
楽しかった。
もっと工夫をしてほしい。　どこと？
足をくくるのをしてほしい。　両方やってみるのもいいね。
・タッチされた数を数える。
・助けて！と言う。

〈計画、反省を記録する「なかよしファイル」〉

ウ　教育相談の実施

毎月第２週を教育相談週間とし、一人ひとりの生活実態を把握したり、児童の思いや困っていることに対して学級担任を中心に素早い対応ができるようにしてきた。また、学期に１回、教育相談体制に変化をつけ、全ての教職員で児童を見つめていくことで、児童の変容を共有化できるように、学級担任以外の教職員との教育相談を行った。事前に児童に第３希望まで希望調査を行い、それを基にして、一人の教職員に偏らないように調整していった。ほとんどの児童は、学級担任以外の教職員との話を楽しみにしている。学級担任以外の教育相談については、「教育相談の記録」に記入し、気になることがある児童については担任に報告し、対応できるようにしている。

２　社会性を高める教育の充実

⑴　構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキル教育等の研修と実践

８月３日、松山商業高等学校から講師を招き、「自他共に大切にできる人間関係を目指して～構成的グループエンカウンターの体験を通して～」の講義を福浦小学校の教職員と合同で実技研修した。ウォーミングアップ、インストラクション、エクササイズ、シェアリングの過程を体験し、人間関係や信頼関係をつくったり、自己発見ができたりする構成的グループエンカウンターの基本的な進め方を知ることができた。

〈教職員の実技研修〉

２学期は、夏休みの実技研修を生かし、校内でも構成的グループエンカウンターやソーシャルスキル教育の理論研究や実践例を紹介したり、技法を取り入れた道徳・学級活動の授業を実践したりして、研修を深めることができた。

⑵　構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルを取り入れた授業

各学年の実態に応じた実践内容を教育課程の中に位置付け、実践を行った。実践後には、反省や感想を書き入れ、今後に生かせるようにした。

＜各学年の授業実践例＞

年	教科等	「主題名」・ねらい	主　な　学　習　活　動
1	学級活動	「いーれて」 ・　仲間に入る一人ひとりのスキルを高める。 （SST）	①　仲間に入るためには、どんな言葉をかけるか、絵を見て吹き出しに言葉を書き込む。 ②　モデリングを行い、笑顔で近づき、大きな声ではっきりと声をかけることに気付かせる。 ③　くまとあなぐらゲームを通して、仲間に入るスキルを高める。
〔反省・感想〕 ・　導入の吹き出しで、仲間に入るための言葉はたくさんでてきた。悪い例を見せると、「大きな声」「笑顔」などすぐに気付くことができた。 ・　ゲームでは、「入れて」「いいよ」、「入って」「いいよ」の声かけが元気よく楽しくできた。「いいよ」と言われてとてもいい気分だったという感想だった。終末で入れてくれなかった経験を語る児童が出てきたので、「だめ」と言われた後、いやな気分のままでいないで楽しい気分になるような工夫が必要だということを話した。			

年	教科等	「主題名」・ねらい	主　な　学　習　活　動
3 ・ 4	学級 活動	「上手な聴き方」 ・　受容的に話を聴いてもらう体験をすることで、その大切さを理解する。（SST）	①　話を聴くときの相づちについて考える。 ②　ペアで「そうだねゲーム」を行う。 ・「あれは○○だね」「そうだね」 ・「私は○○が得意です」「そうだね」 ③　４人組になって感想を話し合う。

〔反省・感想〕

・　相手を受け入れる相づちと否定する相づちについて確認し、ゲームを行った。「そうだね」と言ってもらうと、「自分のことを分かってもらっていると思った」「笑顔で聴いてくれているとうれしい。そうでないと、聴いてくれてるのかなと、不安になる」「笑顔で話すと気持ちいい」などの感想が出た。

・　今後、友達との会話でお互いにどんな相づちを打っているのか、少し意識してみようと投げかけた。学級の中での言葉を意識して聞いていきたい。

＜授業実践指導案（第５学年　学級活動）＞

○　題材名　「もっと知ろう、友達のこと、自分のこと」

○　ねらい　・　友達とのかかわりを通して、自分のよさを発見したり、再確認したりすることで、自己肯定感を養う。

・　友達のこと、自分のことを大切にしようとする気持ちを育てる。

○　展　開

学習活動	主な発問と児童の反応	指導上の留意点と評価 (◎)
1　本時のねらいを確認する。	○　自分のいいところを知っていますか。 ・　自分のいいところって、どこだろう。 **自分のことをもっと知ろう。**	・　自分のことを振り返らせ、自分のことを知りたいなと思えるようにする。
2　「じゃんけんいいところさがし」をする。 	○　「じゃんけんいいところさがし」をしましょう。 ・　背中にカードをつける。 ・　清正じゃんけんをする。 ・　勝った人から、お互いにいいところを書く。	・　ルールが分かるように、エクササイズの仕方を掲示するとともに、教師が手本を見せる。 ・　性格や努力面などいいところを指摘する。
3　「はい、その通り」を声を合わせて言う。	○　背中のカードを取って、「私は○○です」と読みましょう。 聞いている人は、「はい、その通り」とジェスチャーもつけて言いましょう。	・　「はい、その通り」はクラス全員で言い、承認されていることを味わえるようにする。
4　活動を振り返る。	○　活動をして思ったことを発表しましょう。 ・　自分が知らないことが書いてあって、うれしかった。 ・　みんなに「その通り」と言われて、恥ずかしいけど、うれしかった。	・　まず、思ったことを文章に表すことで、素直な気持ちが表れるようにする。 ・　十分時間を取り、自己を見つめられるようにする。 ◎　知らなかった自分に気付いたり、自分のよさを再確認したりしている。（ワークシート・発表）
5　まとめをする。	○　今日の授業の自己評価を書きましょう。	・　自分のことと友達のことを、正しく知ることの大切さに気付かせ、今後の生活に生かそうとする気持ちをもたせる。

＜児童の感想＞

○　自分のいいところがいっぱいあることが分かりました。これからも、自分のいいところ、友達のいいところをどんどんさがしていきたいです。

○　自分のいいところを知っていると言っても一つだけでした。でも、このゲームをして、自分の気付かなかったこと、思ってもいなかったことを友達が気付いてくれていたので、とてもうれしく感じました。

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

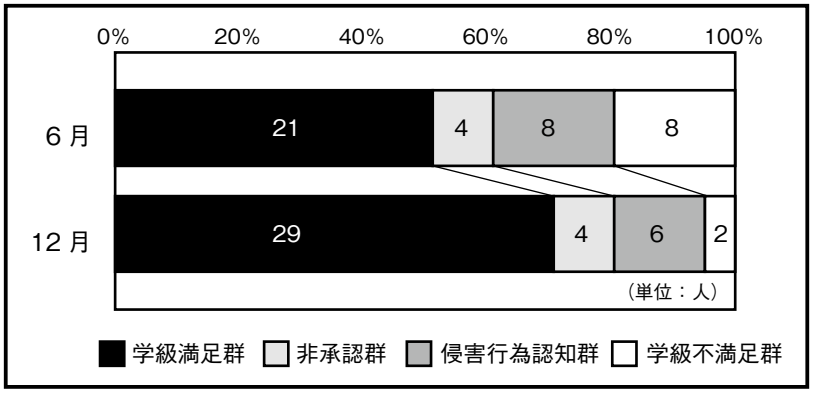
1　児童の変容

(1)　なかよしアンケートによる分析

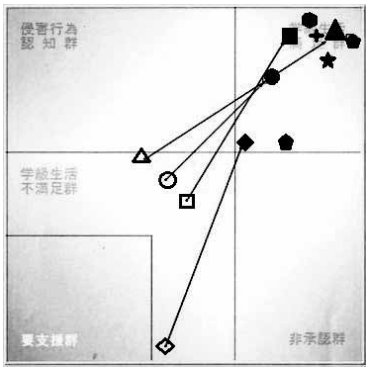
アンケート項目（抜粋）	１学期（人）	２学期（人）
学校は楽しいですか。	は　い　45 いいえ　0	は　い　45 いいえ　0
いじわるや嫌がらせをうけたことはありますか。	は　い　4 いいえ　41	は　い　8 いいえ　37
学校へ行きたくないと思ったことはありますか。	は　い　4 いいえ　41	は　い　0 いいえ　45

１・２学期とも、全員が、「学校は楽しい」と答えている。「いじわるや嫌がらせを受けたことがある」と答えた児童は１学期４名から２学期８名に増えている。これは、すべて低学年であり、児童同士の関係が深まりつつあるという発達段階上のトラブルであると考えられる。また、「学校へ行きたくない」と思った児童は２学期末にはいなかった。いじわるや嫌がらせのトラブルなどは、その都度、学級担任を中心に指導をしているが、同じ児童が集中的にいじわる等を受けるというケースはない。

(2)　Ｑ－Ｕテストによる分析



〈学級満足尺度各群の変化（全校）〉



〈５年生の学級満足尺度の変化〉

学校全体として６月と12月を比較してみると、不満足群が減少し、満足群が増加するという結果になった。変容の顕著な例としては、５年生では、５月に不満足群に入っていた４人が、12月には満足群に入り、９人全員が満足群に入った（上図参照）。Ｑ－Ｕテストの結果から、全体的には今年度の取組によって、よりよい人間関係が育まれ、互いを認め合うことができてきていることが分かる。

しかし、非承認群、侵害行為認知群、不満足群の児童は、低学年を中心として満足群と入れ替わっている者がおり、個別に対応していく必要がある。

２　研究の成果

⑴　教育相談、アンケート調査やＱ－Ｕテストの実施により、児童の実態がより詳しく把握でき、目標の設定、指導方法の考察や各実践につながった。

⑵　児童は、校内・校外の様々な交流活動や異年齢集団での活動を行ってきた。受身の姿勢やマンネリ化を防ぐため、その時々に応じためあてを設定することで、相手を思いやったり、互いに認め合ったりする心を具体的な行動として表すことができるようになってきた。

⑶　地域の人との学習や行事を通して、児童は感謝の気持ちをもつとともに、いろいろな人との人間関係を深めてきている。地域の人からも日頃から児童の様子を見て、積極的に声かけをしていただくなど、いじめの未然防止を含めた児童の健全育成のためにさらに地域の協力を得られるようになってきている。

⑷　構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルなどを取り入れた学習で、児童は他者とのコミュニケーションをとる実践的な態度の大切さを理解できてきた。また、それが日常生活において実践できるようになってきている。

⑸　児童に社会性を身に付けさせる実践について研修していく中で、教師は先行事例研究、実技研修や授業研究などを通して意識を変え、児童理解を進め、授業実践力を高めることができた。

３　今後の課題

⑴　Ｑ－Ｕテストでは満足群が増えるという結果となり、学級満足尺度では児童に改善の傾向が見られたが、今後の変化に注意し、よい人間関係を継続させ、いじめを未然防止する取組を続けていく必要がある。

⑵　校内・校外の様々な交流活動で毎回同じ活動内容を繰り返すのではなく、常に新しいめあてをもたせ、相手の新しい面を発見させながら、人間関係を深いものにしていく活動を計画し、実践しなければならない。

⑶　構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルなどの授業や実践等を更に研究し、６年間を見通して発達段階に応じた年間計画を作成し、計画的に児童の社会性を高めていくための実践を取り入れていきたい。

⑷　いじめの未然防止の取組については、保護者や地域に学校だよりや学級通信、ホームページ等で発信している。学校評価アンケートの一項目としても、いじめ未然防止の視点からの評価を行っている。今後、更にいじめ未然防止の取組についての発信を行い、学校と保護者や地域との相互理解が進むようにしていきたい。

【主な参考文献等】

『グループ体験による学級育成プログラム』図書文化　河村茂雄（2001）
『Ｑ－Ｕ式学級づくり　小学校高学年』図書文化　河村茂雄ほか（2009）
『エンカウンターで学級づくり12か月』明治図書　八巻寛治ほか（2006）
『子どものためのアサーショングループワーク』日本・精神技術研究所　園田雅代ほか（2003）

〈研究推進モデル校〉

愛南町立福浦小学校

Ⅰ　本校の概要

１　校区の概要

本校は、南宇和郡の南西部に位置し、海と山々に囲まれた自然豊かな地域にある全校児童数45名のへき地小規模校である。進学先の福浦中学校に隣接しているが、今年度で閉校が決まっている。校区が広く、徒歩通学の児童のほかに樽見地区と武者泊地区の児童はバス通学をしている。

近年の過疎化により住民数や児童数は減少しているが、保護者や地域は、教育に対する関心が高く、参観日や奉仕作業など学校行事等には進んで参加している。また、三世代同居の家庭も多く、祖父母への敬愛の念も自然と培われている。

地域は水産業が盛んであったが、不況のため以前に比べてやや活気がなく、地区外へ働きに出る家庭も増えている。そのため家庭での親子の触れ合いが少なくなっていると思われる。

２　児童の実態

学級数は、複式学級（第１・２学年）及び特別支援学級（２組）を含む６学級である。

年・組	１年	２年	３年	４年	５年	６年	２組	合計
男	2	1	5	4	5	7	2	26
女	3	1	3	2	4	6	0	19
合計	5	2	8	6	9	13	2	45

児童は素直でおとなしい子が多く、家庭と地域に温かく見守られて生活している。また、少人数であるため学年や男女に関係なく活動したり遊んだりすることが多い。

そのため、学校全体は落ち着いた環境にあり、大きな問題行動も起こっていない。また、特別支援学級の２名の児童へも温かく接し、交流学級だけでなく全校で見守ろうとする態度ができている。休み時間には一緒に遊ぶ姿がよく見られる。

Ⅱ　研究の概要

１　研究テーマ

相手の気持ちを察し、望ましい人間関係をつくる児童の育成

２　テーマ設定の理由

児童は、挨拶ができ、人の話もよく聞き、友達とも仲良く遊べるという社会性が育ちつつある。その一方、幼少期より少人数で過ごしてきたため、友人関係が固定化、序列化している傾向が見られ、相手の気持ちをくみ取ったり、思いやったりする言動が乏しい子、まだ身に付いていない子もいる。時に、それらが原因で、学級内の問題を起こすことがある。更に、こじれるといじめやその前兆となる問題行動を引き起こすことも考えられる。

これらは、相手の気持ちを察するという人間関係を結ぶ基礎の部分が十分に育っていないためだと考えられる。教師もできる限り児童に関わり、その前兆をつかもうと努力しているが、完全とは言えない。

そこで、低学年から発達に応じて自分の意思を正しく伝え、相手の気持ちを察する児童を育てたいと考えた。児童にとって信頼できる友達が増え、また居心地のよい学級・学校となるよう支援したい。

児童が、お互いの気持ちを通い合わせ、会話や行動の伴った望ましい人間関係をつくれるよう中学校・家庭・地域と連携し、学校全体で取り組むことを目指し、本主題を設定した。

３　見込まれる成果及び検証方法

⑴　見込まれる成果

ア　児童は、道徳教育や学級活動などの授業を通して、いじめやいじめにつながるような行動を深く考えるようになり、問題行動がなくなるだろう。

イ　児童は、ソーシャルスキル教育を通して、相手の気持ちを察して思いやる言動が取れるようになるだろう。

ウ　児童は、異年齢間交流や中学校、地域との交流を通して、上級生や地域の方との接し方などのスキルが身に付き、望ましい人間関係を築くだろう。

エ　教師は、道徳の時間や学級活動をより意識的、重点的に行うことにより、児童理解が進み、今後の学級経営に生かすことができるだろう。

オ　家庭や地域は、学校だより、アンケート調査、児童の様子などから、学校の取組を理解し、より一層協力的になるだろう。

カ　東海小学校や福浦中学校との連携を通して互いの取組を学び、本校の指導改善に取り入れることができるだろう。

⑵　取組の検証方法

ア　いじめ等に関するアンケートやＱ－Ｕテストの結果から児童の意識の変容を考察する。

イ　授業や行事後の児童作文や反省から児童の意識の変容を考察する。

ウ　保護者や地域のアンケートを実施したり学校評価項目を設定したりして、意識の変容や取組の評価を行う。

エ　教職員の意識調査を行い、取組の評価を行う。

４　研究の内容

⑴　相手の気持ちを察する心を育てる教育

ア　実践に結び付く道徳教育

イ　望ましい人間関係を育てる学級活動

ウ　良好な対人関係をつくるソーシャルスキル教育

⑵　望ましい人間関係をつくる交流活動

ア　異年齢間の交流活動

イ　特別支援学級との交流活動

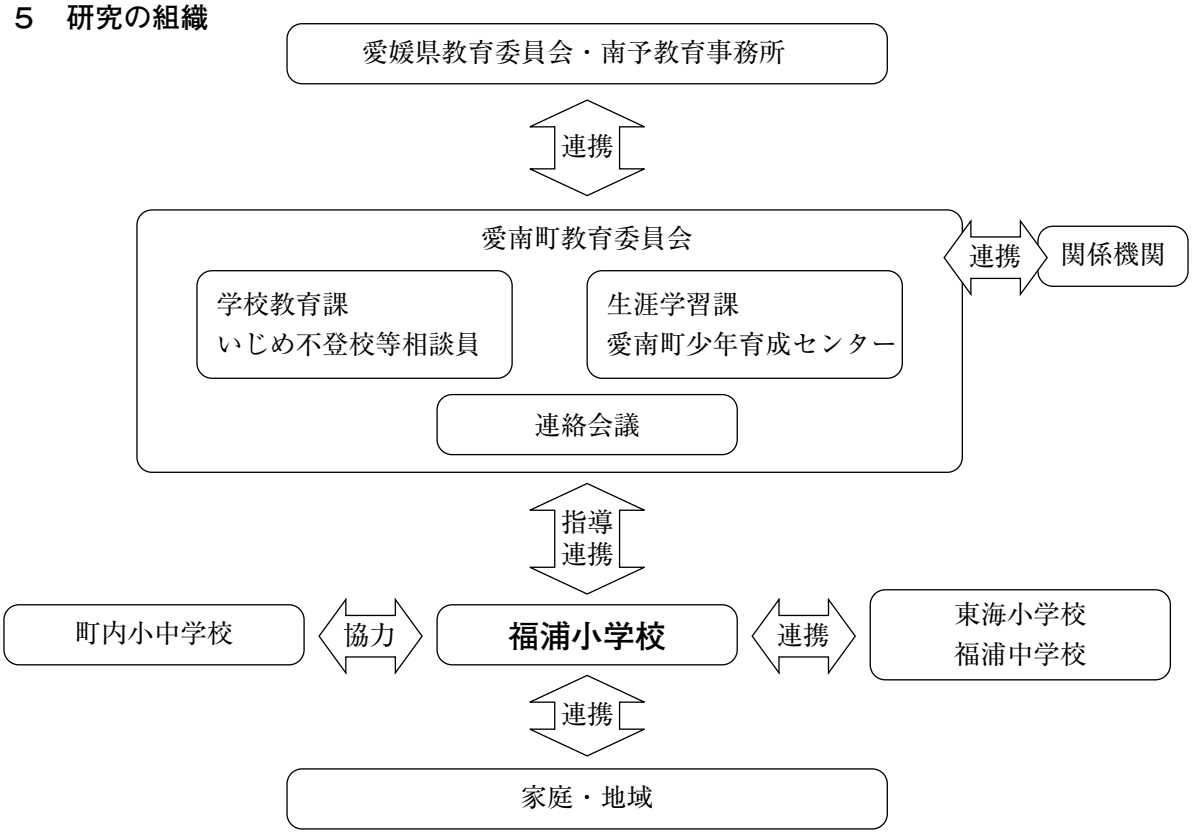
ウ　自然体験や社会体験の充実

(3)　中学校・家庭・地域との連携

ア　福浦中学校との連携

イ　家庭・地域との連携

5　研究の組織



Ⅲ　研究の実践

1　相手の気持ちを察する心を育てる教育

(1)　実践に結び付く道徳教育

資料の人物の心情を理解したり、自分の考えを深めたりするために、役割演技などを取り入れた。また、振り返る時間を確保し、ワークシートや「心のノート」に気持ちや考えを書くことで、自分を見つめ直し、自分のよさや課題について気付けるようにした。

また、実践化を図るには家庭の協力が必要である。できるだけ授業を公開し参観してもらうことで、家庭での協力も得やすくなる。担任と家庭との連絡ノートは、親子で規範意識などを考える機会となっている。

役割演技をする児童

メッセージカードで、お互いの良さを認め合う

【道徳授業の実践例】

第１・２学年　授業参観のしおり

1　道徳　　主題名　　友だちを思う心
　　資料名　　「二わのことり」

2　ねらい

○　相手の気持ちを思いやり、友達と仲良く助け合っていこうとする心情を育てる。

3　授業の流れ

1　友達に温かい言葉をかけられた時の気持ちを思い出し、話し合う。
　　（メッセージカードをもらった時・体育の時間など）

2　「二わのことり」を読んで話し合う。

(1)　ミソサザイが、ウグイスの家に行こうか、ヤマガラの家に行こうか迷ったときの気持ちを考える。

(2)　ミソサザイが、ウグイスの家でどんなことを思っていたかを考える。

(3)　ウグイスの家をこっそり抜け出して、ヤマガラの家へ向かうミソサザイの気持ちを考える。

(4)　とても喜んだヤマガラを見て、ミソサザイはどんなことを思ったかを考える。

3　「友達っていいな。」と思った経験を振り返る。

4　歌詞の意味を考えながら、「ひとりのちいさな手」を歌う。

4　特に見ていただきたい点

○　ミソサザイの気持ちを想像し、登場人物に共感しながら、演技をしたり発表をしたりしているか。

○　相手の気持ちを思いやり、仲良く助け合っていこうとする気持ちをもてたか。

(2)　望ましい人間関係を育てる学級活動

夏季休業中に東海小学校と合同で、松山商業高等学校から講師を招き、構成的グループエンカウンターについて実技研修を行った。

そこで学んだ具体的なエクササイズは、２学期以降の学級活動で生かすことができた。例えば、児童が協力して友達を運んだり倒れてくる友達を支えたりするエクササイズは、人と人との間に生まれる不安や緊張をゲーム感覚で手軽に解きほぐし、どの児童もスキンシップを楽しみ仲良く活動することができた。

３人組でエクササイズ

(3)　対人関係の技術を学ぶソーシャルスキル教育

それぞれの学年の発達段階や実態、Ｑ－Ｕテストの結果等を踏まえて、年間指導計画の学級活動の時間を修正し、ソーシャルスキル教育を位置付けた。生活の中にある様々な場面を

取り上げた題材では、ロールプレイを通して温かい言葉がけの練習をしたり、聞き手・話し手どちらの立場でも相手を気遣いながら会話したりする体験をさせた。

友達と関わり合うことは楽しいという体験を十分にさせることで、よりよい関わりへと高めていけるようにねらいを設定した。

【学級活動】【５年 相手を気遣う会話をしよう】【１・２年 心をつなぐ魔法の言葉】

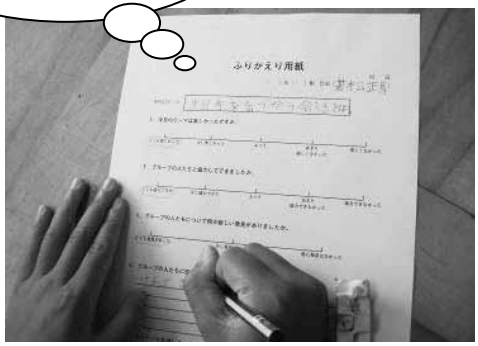
相手を気遣う話し方は、どんなことに気を付ければいいでしょう。

給食で、おかずが足りなくなったら、なんて言ったらいいかな。

相談しよう。相手の目を見て話すことじゃないかな。

ちょっと待ってね、友達から少しもらうね。

相手に質問したり話の相槌をうったりも大事だ。



休み時間も勉強してるね。

【ソーシャルスキル教育の授業実践例】

第４学年　学級活動指導案

1　題材名　「話し上手・聞き上手」
2　学級の実態
本学級の児童（男子４名、女子２名、合計６名）は、明るく活発な児童が多い。グループ活動では、協力して仲良く活動することができる。１学期に実施したQUテストでは、学級満足群４名、要支援群１名、侵害行為認知群１名という結果だった。要支援群の１名は、自分がクラスの友達から好かれていないと考えており、孤立感を感じているようだ。また、休み時間等、児童同士のかかわりを観察してみると、自己中心的な言動が見られたり友達をけなす言い方をしたりする様子が見られた。
そこで、友達と会話をする時に相手を意識して気持ちよく伝え合う仕方を知らせることで、友達を大切にしようとする態度を育てたい。また、意図的にグループを作り、誰とでも仲良く活動しようとする態度を育てたい。
3　本時のねらい
感じよく伝える言い方や、相手の話をしっかり聞く方法を知り、気持ちのよいやり取りをしようとする態度を育てる。
4　展　開

学　習　活　動	主な発問と児童の反応	指導上の留意点と評価
1　３人組でミニゲーム	○　３人組になって色々な楽しい活動をしましょう。(ひっこしゲーム、バランス崩し等) ・　やったあ、楽しそうだぞ。 ・　誰と一緒にやるのかな。	・　机を下げて、活動できる場所を用意する。 ・　体を動かしてリラックスさせる。
2　本時のねらいを確認する。	話し上手・聞き上手になろう。	・　めあてを知り、ふだんの自分の話し方や聞き方を想起させる。
3　いろいろな聞き方をして、よりよい聞き方を考える。	○　いろいろな聞き方をしてみて、どんな聞き方がいいか、考えてみましょう。 ①いすを使って ・　背中合わせで聞く。 ・　同じ方向を向いて聞く。 ・　向かい合って聞く。 ②返事をしないで ・　目を閉じて聞く。 ・　そっぽを向いて聞く。 ・　うなずきながら聞く。	・　二人組を作り、活動させる。 ・　聞いてもらっていないと思われる場面を思い返すために６パターンの場面を体験させる。 ・　どんな聞き方がいいか、よりよい方法をたくさん出させる。
4　聞き上手になる方法をまとめる。	○　先ほどの聞き方をもとにして、「聞き上手」になる方法を３つにまとめました。 ①　相手の顔を見て ②　にっこり笑顔で ③　うなずきながら	・　話し手は、「聞いてもらえるとうれしい。」と感じることを知らせる。
5　注意するときの伝え方を考える。	○　今度は、注意するときに相手の人が嫌な気持ちにならない方法をみんなで考えてみましょう。 ・　言い方を変えてみる。 ・　言葉を変えてみる。	・　いろいろな生活場面で起こりがちなトラブルの例を出し、考えを引き出しやすくする。 ・　出された意見をもとに、ロールプレイして、考えさせる。
6　感想を発表する。	○　話し上手・聞き上手になる方法をやってみて、気付いたことや感じたことはありませんか。 ・　うなずきながら聞いてもらうとうれしかった。 ・　注意するときも乱暴な言葉は使わないようにしようと思った。	【評価】 ◎　気持ちのよいやり取りをしようとしているか。 （観察・発言）

ミニゲームでリラックス

いろいろな聞き方をして、話し手の気持ちを考えよう

話す人はどの聞かれ方がうれしいかな？

【児童の感想】

・　そっぽを向いて聞かれるのは、話していてあまり楽しくなかった。ぼくは、そんな聞き方はしたくないなと思った。
・　聞き上手になるために、「うなずきながら」はできているので、次は「にっこり笑顔」で聞けるようになりたい。
・　わたしは、注意する時におこった言い方をしてしまうので、気を付けたい。
・　今日勉強して、話している人が気持ちよく話せるような聞き方をしたいと思った。

２　望ましい人間関係をつくる交流活動

⑴　異年齢間の交流活動

ア　運動会や音楽発表会等の学校行事

本校は小規模校のため、学校行事では他学年合同で活動する場面が多い。運動会の生活班対抗競技では、班ごとに作戦を考えたり、練習に取り組んだりする姿が見られた。また、音楽発表会の練習では、同じパートの児童が教え合うなど、進んで人と関わり合おうとすることが増えてきた。

生活班対抗競技

音楽発表会の練習

イ　ふれあい集会などの児童会活動

全校での児童会活動では、生活班に分かれて活動をしている。初めての１年生は、活動に戸惑う場面が多い。１学期は、高学年児童が教師に言われて低学年を手伝うことが多かったが、経験を重ねるにつれ、進んで教えたり、手助けしたりすることが増えてきた。

芋掘り集会

高学年のリードによる話合い（生活班）

ウ　遊び時間や放課後など学校生活全般での活動

雨の日の休み時間は、体育館を学年単位ではなく生活班で使用するようにした。そうすることで、高学年児童はみんなが楽しめる遊びを考えたり、１・２年教室に誘いに行ったりするようになった。

体育館を使用できない児童は、校長と一緒に百人一首をしたり、図書委員会による読み聞かせを聞いたりしている。雨の日でも楽しく過ごせるような工夫をして、児童の居場所を少しでも作れるようにしている。

生活班で遊ぶ児童

百人一首を楽しむ児童

図書委員の読み聞かせ

⑵　特別支援学級と通常の学級との交流及び共同学習

障害のある児童も障害のない児童も、互いに正しく理解し、誰とでも仲良くする心や相手の立場に立って考え行動する力を育てるために、特別支援学級と通常の学級との交流及び共同学習を積極的に行っている。

もちつき大会の交流

特別支援学級の児童は、朝読書、朝の会、給食、清掃等の活動及び特別活動を交流学級の児童と共に行っており、教科学習においても児童の実態に合わせて、音楽、体育、社会、理科について交流及び共同学習をしている。入学当時から一緒に学習をしているので、通常の学級の児童と協力しながら学習を進めるこ

とができている。

交流学級の児童は、学習や学校生活の場面において、優しく言葉をかけたり、手を貸したりする様子も見られ、互いに助け合おうとする活動ができている。また、全学年とも日頃から一緒に活動しているので、特別支援学級の児童が困っているとすぐに手をさしのべる姿が見られる。

今後は、全校児童が、同じ社会に生きる人間として共に活動を楽しもうとする姿勢や意識がもてるように支援していくことが必要である。

⑶　自然体験や社会体験の充実

ア　集団宿泊体験学習や篠山小学校との交流学習

５年生は、６月に高知県で幡多青少年の家利用学習を西海地区の小学校３校合同で行った。他校の児童とボディーボードや磯遊びをし、飯ごう炊さんで昼食作りにもチャレンジした。普段はしない体験を通して自然に親しみ、他校の児童と交流を通して友情が芽生えたようである。そのため、６年生の３校合同での修学旅行もすぐに打ち解けることができている。

３・４年生は、７月に篠山小学校と交流学習を行った。お互いの地域のクイズを出し合ったりドッジボールをしたりして交流を深めた。交流学習後に、南宇和郡の陸上大会で出会ったときには、挨拶したり応援し合ったりする姿が見られた。

３校合同の集団宿泊体験学習

篠山小学校との交流学習

イ　各学年の社会体験

６年生の修学旅行や３年生の社会科見学など、公共の場で行動することによって、社会的ルールやマナーを学ぶことができる。多くの人と関わりをもつことで、場に応じた態度や言葉遣いを身に付けることができつつある。

お店の見学（３年）

３　中学校・家庭・地域との連携

⑴　福浦中学校との連携

本校は、福浦中学校と隣接しており、運動会や学期ごとの地区清掃などを合同で行っている。

今年度の運動会は、小中学校だけでなく地域との連携も図り、小中地域合同運動会として開催した。中学生や地域の人と運動を通した交流ができた。

小中合同運動会

⑵　家庭・地域との連携

ア　学校だより等による情報発信

学校だよりを発行して、学校の経営方針や日々の教育活動を家庭や地域に伝えている。また、学年通信を発行し、児童の様子をより詳しく伝えている。今年度は、ホームページを刷新し、リアルタイムでの情報公開を心がけた。

イ　ひなさまグループや老人クラブとの交流

老人クラブには、ふれあい集会やぎょしょく教育で協力をしていただいている。特に、有志のお年寄りが集う「ひなさまグループ」からは、生活科の野菜作りや芋掘り集会、もちつき集会などで丁寧に指導をしていただいている。

ふれあい集会では、地域の方が楽しめる遊びを考えて準備をした。今までの感謝の気持ちをもち、保育園児も一緒に楽しむ姿勢がどの児童にも見られた。

お年寄りや園児とのふれあい集会

【ふれあい集会の感想】

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

1　成果

⑴　問題行動の減少

各学年、Q-Uテストの結果を踏まえ、２学期以降の学級活動や道徳の時間に友達との関わり方や相手の気持ちを考える学習をしてきた。それらを通して、友達との関わり方を考え、落ち着いて行動することができ始めている。トラブルの多かった児童も、自己主張するだけでなく友達の意見を聞き入れて行動することができるようになってきた。そのため問題行動がほとんどなくなっている。

⑵　温かい言動の広がり

学級活動にソーシャルスキル教育を取り入れたことで、日常的に温かい言葉を使おうとする児童が増えてきた。友達の苦手なことや困ったことを見逃さず、進んで手伝おうとする児童も増えている。そのため、どの児童にとっても安心できる学級や学校になってきている。

「学校生活アンケート（２学期）」でも、「学校で友達と仲良く遊んでいるか」の問いに

は、98％が「はい」と答え、「家に帰ってから友達と仲良く遊んでいるか」の問いに90％が「はい」と答えている。友人関係は、ほぼ良好である。

⑶　望ましい人間関係の構築

保育園、中学校、他校児童、地域などの異年齢間交流を通して、園児や児童生徒、地域の方との接し方や、初対面の人との接し方などを学ぶことができた。挨拶や丁寧な話し方をすることで、交流がスムーズにいくようになった。小規模校での固定化した人間関係を打破するためにも、地域や他校との交流は、多様な人間関係を学ぶ有意義な経験となっている。

⑷　児童理解の深まり

Ｑ－Ｕテストの結果を分析し、２学期以降の取組に生かすことができた。結果を基に、道徳の時間や学級活動、教育相談などの充実を図り児童理解を深めることができた。日頃の観察だけでは捉えられない児童の内面が分かり、教師の方から積極的に関わるきっかけともなった。

⑸　保護者・地域の理解

学校評価の健全育成の項目では、肯定評価が８割以上あり、学校の取組に対して理解が深まっている。地域の見守り隊や児童生徒を守り育てる協議会の活動など、地域との連携も児童の健全育成に役立っている。

２　課題

⑴　指導の継続

児童の望ましい言動が増えているが、相手を傷つける言動が全くなくなったわけではない。今後も相手の気持ちを考えて行動できるよう道徳の時間や学級活動の充実を図り、教育相談やほっとタイム（教師と一対一の交流）の指導も継続していきたい。

⑵　学級経営の充実

12月のＱ－Ｕテストの結果、「要支援群」から「学級生活満足群」へ移行した児童がいた反面、「要支援群」のまま、あるいは新たに「要支援群」に入った児童がいる。原因や背景を探り、職員会議や研修の時間に学校全体で話し合う必要がある。

⑶　家庭・地域との連携

学校で身に付けたスキルが、家庭や地域で生かせるかが重要である。そのためには、家庭や地域にもこれまで以上に学校の取組を理解してもらうことが必要である。

今後もホームページなどを中心に広報活動を行い、児童が望ましい人間関係が築けるよう協力を呼びかけていきたい。

平成22年度　文部科学省委託事業成果報告
生徒指導・進路指導総合推進事業
「いじめ対策緊急支援総合調査研究」
（県事業名）いじめの未然防止実践研究支援事業
発　　行　　愛媛県教育委員会
発行年月　　平 成 23 年 ３ 月